奈良国立文化財研究所年報

1971

奈良国立文化財研究所

藏王堂渡海船額

平城宮推定第１次内裏段塼積（左）・階段（右）

平城宮推定第１次内裏（南から）

平城宮推定第２次内裏東外郭礎石建物（西から）

小治田宮推定地　塼・池（北から）

小治田宮推定地庭園と古宮土壇（南から）

藤原宮玉石池（北から）

平城宮埴積基壇建物模型

奈良山53号窯（右）Ⅰ号窯 ・（左）Ⅱ号窯

処 理 後　　X線写真　　処 理 前

兵庫県宮山古墳出土鉄地銀象嵌金鍍金環頭大刀

目　　次

口　　絵
蔵王堂渡海船額
平城宮推定第１次内裏
平城宮推定第１次内裏段塼積・階段
平城宮第２次内裏東外郭礎石建物
小治田宮推定地庭園と古宮土壇
小治田宮推定地池・塼
藤原宮玉石池
平城宮塼積基壇建物模型
奈良山53号窯
兵庫県宮山古墳出土鉄地銀象嵌金渡金環頭大刀

はじめに…… 1
創建期東大寺大仏の比例的復原…… 2
蔵王堂の渡海船額…… 6
彫刻・絵画の調査…… 7
今井町の調査（３）…… 8
石川県の民家調査……12
本瓦葺屋根の雨仕舞実験……14
平城宮塼積基壇建物および一郭の復原模型……15
建築遺構調査・史跡整備・測量……18
高山寺所蔵　釋摩訶衍論論義草紙背文書……19
『七大寺巡礼私記』の研究 ……22
典籍古文書調査……22
平城宮跡・飛鳥藤原宮跡発掘調査……23
馬寮北域
馬寮南域
平城宮東張出部東辺
左京二条二坊六坪
推定第１次内裏
推定第２次大極殿・内裏東外郭
小治田宮推定地
豊浦寺跡
藤原宮大極殿東方
奈良山53号窯の調査……37
海竜王寺の発掘（２）……43
その他の調査……45
遺跡・遺物の保存……50
平城宮跡の整備（１）……52
植物根系の調査……53
外国出張概要……55
公開講演会要旨……57
奈良国立文化財研究所要項……60

奈良国立文化財研究所年報　1971

発行日　1971年11月１日　　編集・発行　奈良国立文化財研究所　　印刷　共同精版印刷株式会社

はじめに

1970年は飛鳥保存に対する世論が急激におこり，12月18日には，飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存等に関する閣議決定がなされるなど，当研究所にとってもあわただしい1年であった。

いわゆる飛鳥地区と藤原地区とは歴史的にみても一体的に保存すべきであると考える当研究所としては，すでに同年4月より平城宮跡発掘調査部の中に飛鳥・藤原宮跡調査室を設け，両地区保存の基礎となるべき発掘調査を開始した。飛鳥地区の発掘調査については，当研究所としても既に1956年より飛鳥寺跡，つづいて川原寺跡の発掘調査を行っており，その後平城宮跡の発掘をいそぐ関係上調査は一時中断されていた。再開した調査の第一着手として小治田宮推定地を選んだが，同地区からは学術的にも極めて興味ある遺構が発見され，更に今後の発掘調査によりその全貌が知られることが広く期待されている。

飛鳥・藤原地区の保存の根幹となるものは発掘調査による正確な遺跡の確認であることはいうまでもない。特にこのことについて一般の方々の理解と援助をお願いしたい次第である。

1971年11月

奈良国立文化財研究所長

松　下　隆　章

創建期東大寺大仏の比例的復原

美術工芸研究室

東大寺大仏（盧舎那仏坐像）の創建期における規模とプロポーションがいかなるものであったか。この報告は「大仏殿碑文」および「延暦僧録文」に記される法量と，近来研究所において実施している仏像の写真測量成果とにもとづいて，創建期大仏の比例的な復原を試みたものである。

文献に記される法量の検討　碑文および僧録文によって明らかな法量は第１表に掲げた計30箇所である。このうち坐高・腹長・掌長は両文献で数値が異なるが，僧録文の掌長１丈６尺は常識的にも何かの誤りとみられ，また坐高は古来の伝承に従えば碑文の５丈３尺５寸が一般的であるので，この３箇所についてはいずれも碑文の法量を採用した。

次に，両文献の法量がすべて像の２点間距離を示していることはいうまでもないが，それらが各々直線距離か，あるいは像面に沿った実距離であるのか，この限りでは断定する根拠はなく，またここでは大仏の基本的なプロポーションを推定復原することが目的なので，作図上の便宜も考えて一応すべてを正射投影による直線距離とみなして用いた。

また，上記法量における計測点について検討を加え，特に解釈をした主なものを挙げれば以下のようになる。なお，多くはごく常識的に解釈した。①目間＝その長さ１尺６寸を作図上の構成から考えて両眼の内眥間とした〔7〕。②自鼻前至眉間＝鼻稜の最下端，すなわち鼻先と，両眉が迫って鼻稜に連なる鼻稜のつけ根まで〔9〕。③耳長＝いわゆる耳の長さ。

第１図　大仏復原図（正面全図）

ただし位置は写真測量成果によって，耳輪最頂点がほぼ髪際線に水平な位置〔13〕。④肩径＝いわゆる肩幅。しかし，計測点は把え難いので，写真測量成果をもとに，仏像の三道最下端に接する水平線上に求めた〔15〕。⑤胸長＝胸幅に当てた〔17〕。⑥臂長・肱至腕長＝臂長は右上膊の長さ，作図上では右肩（三道下の水平線）より前膊の上端まで〔18〕。肱至腕長はさらにその先，つまり前膊部上面〔19〕。⑦腹長＝腹のくびれの左右端の長さ〔20〕。⑧脛長＝脹脛（ふくらはぎ）の長さ。結跏して上に重なる左足に求めた〔23〕。⑨足下＝仏の32相中の足下安平相の用例にもみるように，いわゆる足裏の長さ〔25〕。⑩面長＝普通髪際以下顎までをさすが，この場合，面幅・肉髻高・自髪際至頂などとの均衡を考えると，肉髻下から顎までが該当する〔27〕。

写真測量成果の応用　上述の文献の法量における計測点は，必要に応じて写真測量成果にもとづいてその位置と相互関係を検討したが，ここで特に問題になるのは「膝前径」についてである。作図上，

対照番号	大仏殿碑文	（尺）	延暦僧録文	（尺）
1	坐高	53.50	結跏趺坐高	52.40
2	肉髻高	3.00	肉髻高	3.00
3			自髪際至頂	7.00
4			自眉上至髪際	1.94
5			眉間	1.10
6	目長	3.90	目長	3.90
7			目間	1.60
8			自目至眉	0.80
9			自鼻前至眉間	4.50
10	人中長	0.85	人中長	0.85
11	面広	9.50	面径	9.50
12	頤長	1.60	陣長	1.60
13	耳長	8.50	耳長	8.50
14	頸長	2.65	頸長	2.65
15	肩長	28.70	肩径	28.71
16	眉長	5.45	眉長	5.45
17	胸長	18.00	胸長	18.00
18	臂長	19.00	臂長	19.00
19	肱至腕長	15.00	肱至腕長	15.00
20	腹長	13.00	腹長	15.00
21	掌長	5.60	掌長	16.00
22	中指長	5.00	中指長	5.00
23	脛長	23.85	中脛長	23.85
24	膝前径	39.00	膝前径	39.00
25	足下	12.00	足心長	12.00
26	膝厚	7.00	膝厚	7.00
27	面長	16.00		
28	自鼻前径	2.94		
29	同高	1.60		
30	口長	3.70		

第1表　東大寺大仏法量（創建期）

第2図　大仏復原図（側面全図）

第３図　大仏復原図（頭部正面部分）　　第４図　大仏復原図（頭部側面部分）

これを現在われわれが使用しているいわゆる膝張（膝幅）と解釈して用いると，膝張が像高に対してやや短かいのが注意される。これが巨大な大仏における特色とみれば問題はないが，他方，第５・６・７図のように写真測量成果における仏像の像高と膝張との関係をもって比較すると，大仏に限って膝張が短かく，立面図においてやや安定感に欠けるきらいがあるのは不自然である。すなわち奈良時代の代表作例である薬師寺金堂本尊および唐招提寺金堂本尊においてはもとより，藤原和様彫刻の典型とされる平等院鳳凰堂本尊においても，いずれも膝張をもって直径とする円を，像の正中線上に中心を求めて描けば，その円周がほぼ白毫位置に接することが明らかとなるが，これを試みに大仏の立面図で用いると，円周は像の鼻先ないし口の辺に当って他とかなり相異する。さらに注意すべきことは，第５・６・７図[註1]で，

第５図　薬師寺金堂薬師如来坐像実測図　　第６図　唐招提寺金堂盧舎那仏坐像実測図

上述の円の中心を通り（中心はい

は，肩先にて三道下の水平線と交わることになり，ここに膝張を直径とする円によって，仏像の「膝張」と「肩幅」とさらに「白毫位置」との相関関係がほぼ一定であることが確かめられる。したがって，この相関関係を大仏においても適用しようとすれば，その膝張は少くとも第1図にみるような長さを要し，その結果，逆に文献でいう膝前径とは普通にいう膝張を示すものではなく，膝前地付きの両端の長さか，あるいは両膝頭間を指しているものかとも考えられる。したがって，もしこの推測と解釈が当っているとすれば，創建期の大仏のプロポーションは，意外なことに薬師寺本尊や唐招提寺本尊のそれとほとんど共通したものとなるのは注意されなければならない。

結論　以上のように文献に記された創建期大仏の法量と，仏像の写真測量成果をもとにして，大仏の比例的な復原を試みることができたが，これによって結論づけられることは，1），大仏のプロポーションは，膝張を保留すれば，ほとんど他の仏像のそれに共通していること，2），文献にいう膝張をそのまま用いれば，大仏のプロポーションは，他像に対してやや短かいことが指摘できること，3），もし膝張について前述のような解釈が可能ならば，さらに大仏のプロポーションは他の像のそれと全く一致すること，4），写真測量の成果として，奈良時

の位置の相関関係が支配していることが認められよう。一般に大仏は巨像なるがゆえに，頭部が他に比較して大きいかのように推測されているが，少なくとも創建期の大仏においては，それが俗説といわなければならない結論となったことは十分に注意されてよかろう。

（なお，ここでは像の比例的な復原にのみしぼったので，像容・印相等に関する復原的な考証は省略した。したがって復原図においては仮に現像に倣って通肩相，与願・施無畏印として表現した。）

註　1　大仏蓮弁毛彫の千葉釈迦像は多分に絵画的な表現がみられるが，それでも膝張はほぼ白毫下から両膝下端接線までの長さに相当している。

2　現在の大仏の膝張は 40.57尺で，文献でいう 39.00 より若干大きいが，もとよりこれが当初のままであるとは断定できない。

第7図　平等院鳳凰堂阿弥陀如来坐像実測図

（長谷川　誠）

蔵王堂の渡海船額

美術工芸研究室

美術工芸研究室が吉野町の依頼によって，昭和45年度に行なった吉野山の美術工芸品調査の収獲の１つである（口絵）。

この絵馬はかつて他の絵馬と共に蔵王堂の外陣に掲げられていたものであろうが，現在は内陣の向って左側の通路にたてかけられている。竪274cm，中央で288cm横455cm，絵馬としては最大級のものである。周囲の縁は黒漆塗に桜花文の金銅金具を打ち，両面は板十二枚をたてにつなぎ，白土の下地を作る。絵は船に荷を積み上げ，降し，船上では宴を開き，岸辺では見物する人々を美しく描いている。余白には金箔をはり，下部中央より右側に奉納者約15名の名前を，右上部には万治四年（1661）の奉納銘を記している。

いうまでもなく，これは慶長年間から寛永年間にかけて行なわれた初期風俗画の系譜に属するものであるが，万治四年の年記を持つことは，寛永期の年記（寛永９年・11年）のある清水寺の末吉船，角倉船図額などと共に，初期風俗画の編年を行なう場合に重要な資料となるもである。

蔵王堂は古来，熊野，木津川など船舶業者の信仰を広く集めていた。ここに記されている奉納者15名は，いま剝落により，すべての名前を知ることが出来ないが，中に「紀伊国屋小七郎」などの名前も見え，恐らく熊野の廻船問屋衆であり，その関係の資料としても貴重なものと思われる。

なお，判読し得られる氏名を記せば凡そ次の通りである。向って左より，堀内九郎兵衛，澤田屋弥兵衛，市口次郎兵衛，紀伊国屋小七郎，□中三郎□□，□(黄か)屋□□□門，□屋喜右衛門，□□屋□□，一人おいて原野善右□□，以下五名は剝落のため，ほとんど判読しがたい。この奉納者名は便宜上，比較的よく残る向って左，即ち末尾より記したが，奉納者列名の右端には前文のような別の字が書かれた痕跡が残っている。

（松下隆章）

第１図　蔵王堂所蔵渡海船額（部分）

彫刻・絵画の調査

美術工芸研究室

仏像納入文書の調査研究　昨年度によって調査作例は 100件に達し，ほぼ調査段階を終了したので，今年度以降はもっぱら資料の整理・解読に当り，その資料集成を期して編集・出版準備にかかった。また，長谷寺本尊十一面観音像の調査にともない，同随侍像である赤精童子・難陀龍王両像から納入品を確認，これについても調査し，資料整理を行なった。

南都造像史の研究　昨年度に継続して南都の平安・鎌倉時代の作例の調査に当り，特に興福寺旧西金堂諸仏と，同寺中金堂所在の薬王・薬上菩薩像，四天王像等を調査するとともに，同寺の沿革と諸像の焼失・復興・移動について資料を検討した。また法隆寺伝法堂の平安諸仏および同寺の鎌倉彫刻についても調査した。

写真測量による仏像実測調査　平城調査部計測修景室と協同し，今年度は正倉院伎楽面について補足的な実測調査を行ない，第1次・第2次調査の欠を補い資料を整備した。また，従来の仏像写真測量成果にもとづき，薬師寺本尊・唐招提寺本尊・平等院鳳凰堂本尊の実測図について，各像に共通する比例権衡（Canon）を究明し，これを応用して創建期東大寺大仏の比例的復原を試みた（2ページ）。なお，興福寺仏頭（旧山田寺仏頭）実測図をもとに，2分の1模型（英国 Fairey Surveys Ltd.）を試作して，その成果を検討した（第1図）。

その他の彫刻調査　奈良県吉野町の依頼で，龍門・中龍門・国栖・中荘の各地区と，吉野山地区の諸社寺の彫刻を調査し，国栖の大歳神社の男・女神像（鎌倉時代）3軀を確認した。

南都仏教絵画の研究　昨年度につづいて，中世の仏教絵画と南都高僧像を中心に調査研究をおこなった。主な調査寺院は薬師寺，園城寺，東大寺，宝山寺，西大寺，醍醐寺，曼荼羅寺などである。なお本年は，東大寺について，『東大寺絵画調査目録』を作製した。

このほか，本テーマに関して，四日市市および吉野町の絵画調査を，依頼によって行なった(6ページ)。

美術品複製のための試験的研究　絵画・書跡の資料保存と基礎研究とのために，無収差原寸撮影の方法の開発を試みた。メーカーの協力をえて，西大寺仁王会本尊像と京北班田図の二点について，それぞれ原寸と縮尺の無収差写真を撮影し，前者の合成により原画の複製を作った。この試作は，単色写真においては相当の成果をえたが，多色写真はなお改善の余地が多い。

第1図　興福寺仏頭模型

建造物研究室では，昭和43年度から奈良県橿原市今井町の民家調査を実施している。これまでに町全体のほぼ8割にあたる地域で調査を終え，残るのは東辺の一部となった。この民家調査は，民家を個々にとりあげるのみでなく，今井町という歴史的都市のなかでの住空間をも問題としているのであって，将来の都市研究あるいは歴史的都市保存再開発構想に対して基礎資料を提供するものと考える。なお本年は美術工芸・歴史両研究室の参加をえた。

Ⅰ 調査および資料

調査項目　今井町でこれまで行なった調査項目をあげよう。

1．民家調査　悉皆調査を目標とし，各戸の現状平面図の作成・復原の見通し・建築年代推定・保存状況などの評価・住み方の調査・庭園の調査を行う。主要民家についてはさらに復原調査など精査する。

2．町 :調査　町並にそった各家の正立面の写真撮影（ニッコールUD20mm使用)。航空写真・現状調査などから町並の立面図作成。屋根伏図作成。

3．寺社調査　建築・石造物・古文書・絵画など文化財の調査。

4．文献調査　都市・建築関係資料の収集。

5．都市調査　町割・道路交通・上下水・防災・施設・土地家屋の所有関係・利用状況などの調査。

6．意識調査　住民の町・住宅の保存などに関する意識調査。職業・家族構成などに関するアンケート調査（奈良女子大学担当)。

7．その他　住民の交際・講その他社会学的調査など。

上記の各項目のうち，これまでは民家調査を主軸としてすすめており，この部分はかなり

第1図 今 井 町 平 面 図（部分）

進展した。一方，都市調査は緒についたばかりであるが，今後の主要なテーマとなろう。

都市調査の内容は，計画技術的なものから社会・経済的なものまで多方面にわたる。歴史的都市調査の場合，その項目は他の場合とはおのずから異なろう。上記の調査項目はわれわれがこれまでの調査の経験によって得たものであり，調査の進展にしたがって当然，修正され，整理されるべき性質のものである。

作成図面　調査はまず現状を把握し，復原的考察や歴史的調査を加えながら，今井町の民家や都市の性格を究明していく。ところで，これまでの調査の結果として，作成される図面や今後，調査を重ねながら作成されるはずの図面は各種多様であるが，主要な図面として，まず最初に次のものを考えている。

1．今井町平面図（現状・復原）　各戸の間取りまで記入するもので，もっとも基本的な資料となる。

2．今井町町並図（現状・復原）　主要な町並の立面図の作成。

3．今井町復原図・変遷図　成立時・江戸時代・明治時代・周辺の都市化がすすむ以前から現在におよぶ。

以上の調査研究，図面の作成を通じて，われわれはなにを考えるか。今井町の性格を究明するとともに，町全体として古い姿をよく残すこの町を，住みよい歴史的都市として，いかに保存再開発するかという問題が，つねに意識のうちにある。都市は人々が生活し，つねに

新陳代謝しており，強く生きていくことに意味があるのだから，古い姿を残す（江戸時代を目標とする）ためといって，人々が住めないようなゴーストタウンとなる凍結保存の方法はこのましくない。

われわれはひとつの大きな目標として，『今井町保存再開発構想計画』をかかげ，今後の調査研究をすすめたいと考えている。これには各戸の復原整備・改造計画から，都市レベルの計画——道路交通・公園緑地・施設・設備環境・防災・産業計画——がもりこまれる。当然この構想計画は，今井町の範囲にとどまらず，橿原市・奈良盆地の計画，大阪・京都などとの関係，さらには近畿圏においてしめる位置を考慮して行なわれるべきものである。

Ⅱ 都市としての今井町

今井町は奈良盆地の南端に近いところに位置し，東を飛鳥川で限られるほかは，周囲を水田でかこまれる。周辺の水田は条里制の痕跡をよく残している。航空写真・千分の一の地図でみると，今井町古図にみる今井領は大和国京南路西条里の25条と26条の１里・２里の一部をしめており，主要部の広さは東西７町・南北４町である。

今井町はもと東西南北の４ヵ町とこの東側に続く新町・今町とあわせて６ヵ町からなっていた。新町・今町はのちの拡張とするのが通説であるので，当初の今井町として成立したとみられる東西南北の４ヵ町の部分に注目してみよう。これはさきにのべた今井領のちょうど中央部にあって，東西３町，南北２町（25条７・18・19坪，26条12・13　24坪）をしめ，この外側に土居（薮地）をつくり，さらに外側を濠がめぐっていた姿が想定されるのである。新町・今町はこの東側，飛鳥川までの間につくられ，また北町は北部を拡張し，古図にみられるような今井町が成立したのであろう。古文書や古図はすべて拡張部をふくんでいるから，この拡張の時期はかなり早かったと考えられる。

町割　町割はほぼ格子状に行なわれている。各ブロックの大きさは一様でない。大きなブロックは90m×60m，小さなブロックは40m×35mほどである。当初の町と拡張部とで町割が異なる。前者では各ブロックは東西が長く，後者は南北が長い。家並もまた異なっている。すなわち前者では東西方向の道路が主要なのもので，各家はこの道路に面して正面をつくり，南北方向の道路には側面をみせる。これに対し後者は東西方向ばかりでなく，南北方向の道路に面しても正面をつくっているので，町の景観が異なる。

町割は格子状といっても機械的にわるのではなく，三叉路やわずかに喰違う十字路をつくり，また直線の道路にもゆがみをもたせ，変化をつけている。道路から町の外部を直接見通せるところはほとんどなく，建物が視線をうけとめ独特なビスタを作る。

町割と条里制との関係については，町自体が条里にのっていることのほか，町の中央を東西に通る道路が条里の境界線とほぼみあう位置にある。ただ，この道路も今井町と他に結ぶ幹線道路でなく，古図によると，ここから４町北を東西に走る大坂伊勢道があり，これが幹線道路とみられ，今井町の各道路は通過交通とはならなかったらしい。他の道路にも条里と

直接関係すると断定できるものはなく，むしろ町内部では独自の町割が行なわれ，外部とのとりつき口で条里にあわせて連絡したとみるのが妥当であろう。

建築　今井町の民家は瓦葺で切妻造平入のものが多く，道路に面して，連続した平の屋根面をみせている。交叉点など角地にたつ家は入母屋造として変化をつけるが，家並全体の意匠はおとなしい。

町内には寺院4，神社2がある。この町では城下町で行なわれていた武家地・町人地・寺社地といったゾーニングはみられない。また町内（環濠内）には寺社以外の公共建築や都市施設はほとんどなく，これらが新しくつくられる時は環濠外になる。

商工業　現在の今井町は，盛時とくらべれば商工業を営むものは少く，商工業の町とはいいがたい。交通の便がよいこともあって，大阪方面への通勤者が多く，ベッドタウンとしての性格をもつ。商店などは地元住民を対象とした小規模なものが大部分をしめている。食料品・青果物・酒・調味料・菓子・燃料・衣料品・化粧品・クリーニング・理髪・美容・文房具店など，日常生活に必要な商店は各々5軒前後ある。産業として，注目すべきものは衛生材料（生理帯・オシメカバー等）の加工で，年間の売上げは20億円ほどで，全国シェアの60％をこえるという。このほか印刷屋・薬売などが比較的多い。

むすび　今井町の調査を通じて，都市とはなにか，都市計画とはなにか，都市はどのように生きているかといった大きな問題があることを痛感する。都市史の将来は無限に拡がっている。それにしても，今井町は古い民家と町並・町割をよく残す点，全国的にみても有数の歴史的都市であり，都市研究のうえで重要な位置をしめるであろう。

（宮沢智士）

第2図　今井町地図　数字：条里坪　方格：条里坪割（1町＝108mとした）

石川県の民家調査

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

1970年度の民家調査を石川県下で実施した。この調査は1966年から，各府県が国庫補助をうけて実施している民家緊急調査の一環をなすものである。

調査は第1～3次にわたって行なった。第1次（300棟）は各市町村教育委員会が，第2次（86棟）・第3次（14棟）は当研究所が調査に当った。主任調査員に伊藤建造物室長，調査員に沢村・細見・宮沢・宮本・村上の5名が委嘱された。

石川県は北半の能登半島と南半の加賀地方からなる。民家についても，この両地方で全く異なった様相を示し，「能登型」と「加賀型」に区分できる。構造形式からみると，能登型は入母屋・平入りで，梁間が大きいため，地梁の上に束を立て，上屋梁を狭く（2間半～4間）して合掌を組む方法をとる。これに対し，加賀型は切妻・妻入りを基本とする広間型で，架構は桁行方向に梁を指掛けた上に梁行の梁を配り，さらに上屋梁を重ねている。間取りの相異から以下に述べるように，能登型は3つの型；加賀型は2つの型に分類できる。

能登Ⅰ型　奥能登地方（輪島市・珠洲市・穴水町・柳田村）に分布する。間取りはチャノマ（広間，報恩講などの仏事，神事に使用）を中心に，表側と上手に鍵座敷を構成し，ナンド（寝間），ダイドコロ（居間，食堂），リョウノマ（またはジョノマ，主婦の仕事場，配膳室）などの常の生活の場を全て背面に配置している。この型で最も完成した形式を示す例は柳田村の西尾修蔵氏住宅（第2図1）である。文化7年（1810　墨書）に建設され，年代の明らかな点においても基準例となる。これより古い例として，珠洲市の黒丸長次氏住宅(第1図，第2図2）は17世紀を降らず，県下で最も古い民家である。当初の間取りは表側に座敷3室を並列させ，上手奥に2室の寝間をとり，西尾氏住宅と平面構成をやや異にしている。これは仏間が独立して，鍵座敷を構成する前の平面形式を伝えるものと思われる。

能登Ⅱ型　能登半島の西側に多く分布する。間取りは広間（ヒロマ，オエ，チャノマ）を中心として，上手に座敷（デエ）を2室，背面に2つの小部屋（ナンド，カッテ）を配り，土間側にカッテを張り出している。中島町の座主正盛氏住宅（第2図3）は様式より、18世紀前期の建設と思われ，この地方では比較的古く，ナンドは全く閉鎖的である。

能登Ⅲ型　七尾市・田鶴浜町・鳥屋町・志賀町など，能登半島中部地方に分布する。Ⅱ型と同様に広間を中心とした間取りである（第2図4）。ナン

第1図　黒丸長次氏住宅

第2図　石川県民家平面図　1　柳田村　西尾修蔵氏住宅（復原　文化7年）　2　珠洲市　黒丸長次氏住宅（復原　17世紀）　3　中島町　座主正盛氏住宅（復原　18世紀前期）　4　田鶴浜町　南出昌一氏住宅（現状　18世紀末）　5　金沢市　江戸村旧高田氏住宅（現状 18世紀前期）　6　野々市町　喜多直次氏住宅（現状　19世紀初）　縮尺　1/1500

ドとカッテがもと1室の4間取りであった例があり，また，4間取りのものも若干併存していることから，この平面型を4間取りの発展形とみることもできる。

加賀Ⅰ型　加賀地方全域に広く分布する。妻入りで，表側の梁間いっぱいに土間と広間（オエ，ヒロマ）をとり，奥は座敷（ディ）と寝間（ナンド）に2分する（第2図5）。規模の大きなものにはオエを棟通りで2分し，奥の部屋を4～5室とするものがある。

加賀Ⅱ型　平入りで，広間を仕切って背面に小室（コーマエ，カッテ）をつくる。高松町・宇ノ気町・津幡町の旧国境地方に分布し，加賀Ⅰ型と能登型の中間的な性格を備えている。しかし，調査した限りでは全て19世紀中頃のもので新らしい。

町屋　通り庭をもち，ニワに面して表側からミセ，オエ，ナンド（または座敷等）の順に並べ，オエとニワの一体化した架構をみせている。喜多直次氏住宅（第2図6）のように，大きな家では上手にさらに部屋を加えている。

以上は県下の民家を主に間取りと構造の違いによって分類を試みた結果である。この分類を北陸地方全体のなかでみるとき，平面では加賀Ⅰ型は福井県北部と富山県中間部に，能登型は富山県平野部に，加賀Ⅱ型は富山県の中間部と平野部の中間地帯に分布するものと類似している。すなわち，北陸地方の民家は南部の山岳地帯を中心に分布するものと，北部の越中平野および能登半島に分布するものとで大きく傾向が変り，その接点にあたる地域では，両者の中間的な間取りをもった民家が存在すると云える。なお，能登地方には古い民家が比較的多く残され，民家の変遷を系統的にとらえることが可能であり，今後さらに精査を重ねる必要があろう。

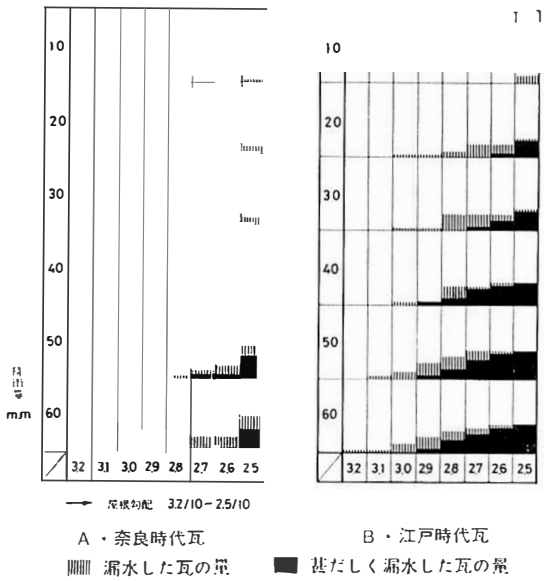
（宮本長二郎）

本瓦葺屋根の雨仕舞実験

建造物研究室

屋根勾配と降雨量との変化によって，本瓦葺屋根にどのような雨漏り状態が発生するかを実験した。これは古建築の耐用年限がおもに雨仕舞の良し悪しによってきまるところから，その実状を把握することによって対策への足がかりをつかもうとするのが目的である。

1号実験機では15mの屋根流れ長さをもつ本瓦葺き屋根の軒先部という条件を設定した。実験結果の一部を図にあげる。Aは奈良時代瓦(長さ34cm・前巾24.5・後巾25.5・厚2・前谷深5・後谷深5.5・平均吸水率9.5%・葺足15) Bは江戸時代瓦（34・24.5・27・2.2・3.4・3.4・12.6%・13.5）でともに現唐招提寺講堂使用のものである。一番問題になる漏りはじめの時点をみると，Aでは降雨量1時間当り10mmのときでは2.5/10勾配（葺地勾配，以下おなじ），であるが雨量が増すにつれて当然急勾配でないともちこたえられないようになり，60mmのときは2.9/10で，すでに雨が落ちはじめる。一方Bでは10mmで2.5/10・60mmで3.2/10と一段と悪い結果がでた。もっともこれには，瓦個々のねじれやひずみ，葺足の長さ，葺き方などいろいろな条件が複雑にからみあってこようが，この実験結果は本瓦葺屋根の勾配の限界をある程度示唆するものといえよう。



第1図　雨仕舞実験装置

ただ，ここでは相当の影響をもつとみられる風力の問題はまったく考慮していない。これにはさらに設備の充実をはかる必要がある。また瓦葺のほかにもひわだ葺や，こけら葺，茅葺などの古建築の維持には欠くことのできない屋根葺材料もある。最近，進歩のいちじるしい保存科学部門とあいまって，これらについても実証的実験をくりかえし，よりよい文化財の保存方法を考え出していかねばなるまい。

（細見啓三）

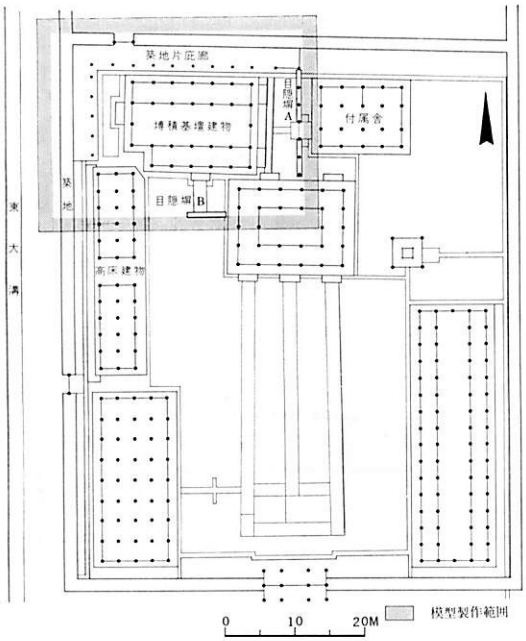
平城宮塼積基壇建物および一郭の復原模型

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

今年度の平城宮建物の1/10復原模型は，すでに1968年度に製作した塼積基壇建物を中心とする，その周辺の建物を復原作製した。これは，第2次内裏東隣にあたり，第21・38・40次調査によって発見した官衙の中心西寄りの一郭である。このうち高床建物，築地片庇廊，目隠塀A・B，築地については，建物を復原したが，正庁および東北付属舎は基壇の復原のみにとどめた。

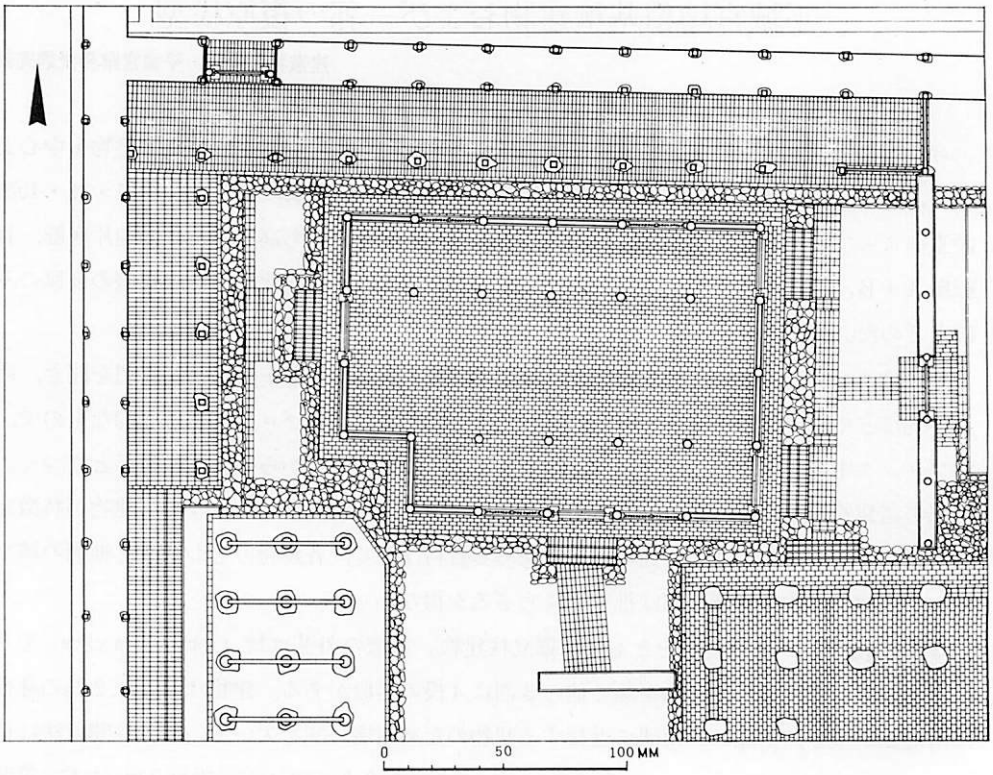
この官衙は，南北125m，東西64mで，四周を築地で囲われ，南正面には八脚門を開き，南より2/3ほどで南と北のブロックにわけられる。北ブロックは南ブロックの付属的なもので，南ブロック中央北寄りに正庁があり，その前方は広場で，南門からの3本の道がとりつく。付属の諸建物はこの広場を囲むようにコの字形に配されている。このように各建物が特徴ある配置をもつものの，この官衙の性格を決める資料はなく，各建物のもつ機能も推測の域を出ない。建物の柱間装置などは推定によらざるを得なかった。

塼積基壇建物　塼積基壇をともなう掘立柱建物。基壇の外装は塼（30cm×18cm×8cm）を8段平積みにしたもので，北面を除く他の3面に4段の階段がある。建物は6間×2間の身舎に南北庇がつき，南庇は西南隅に近接する建物のため西端一間を欠いている。柱間寸法は桁行2.8m（9.4尺），梁行3m（10尺）等間で，なかには掘立柱の柱根（径36cm）が残っているところもあった。屋根は2通りの形式が考えられ，一つは身舎・庇を一流れとする切妻造本瓦葺，他は身舎のみを切妻造本瓦葺とし，この南北に板または桧皮葺の庇をつける案である。ここでは前者で設計し，内部の床は塼敷，柱間装置は階段のあるところのみ板扉，他は連子窓または土壁とし，構造の基本については法隆寺の伝法堂にならった。

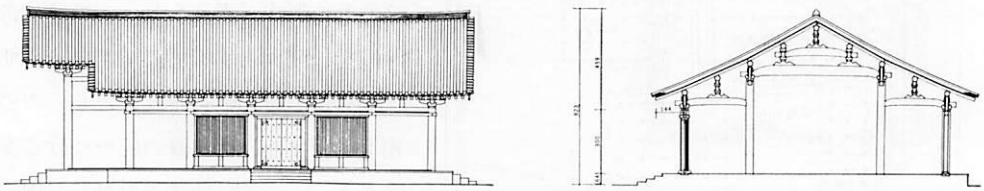


第1図　南ブロック配置図

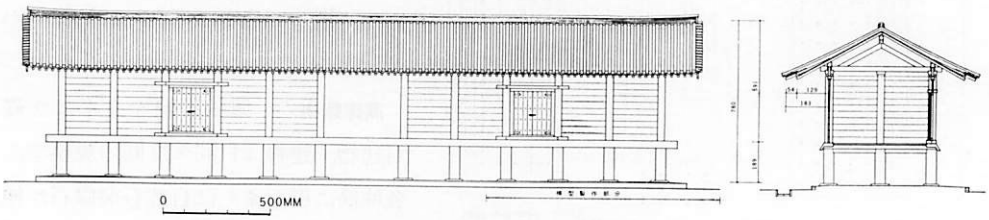
高床建物　塼積基壇をともなう礎石建物。建物は11間×2間の規模で，各柱筋に根石または自然石製礎石が検出された。柱間は桁行，梁行とも2.4m（8尺）等間，ただし，桁行中央



第2図　平　　面　　図

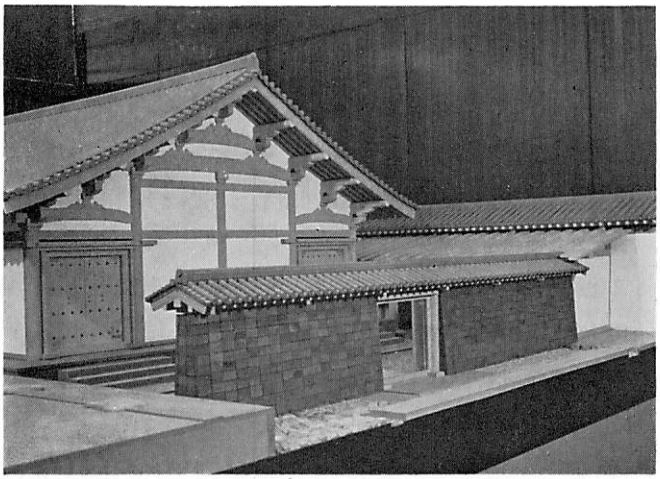


第3図　塼積基壇建物立面図・断面図



第4図　高床建物立面図・断面図

の間のみ3.9m（13尺）と広い。建物の用途についてはわからないが棟通りの柱を省略しないところから，高床式倉庫と考え，中央間が広い点から5間×2間を連結した双板倉と考えた。細部については，現存する奈良時代の校倉や法隆寺綱封蔵などを参考にした。なお，この模型の扉の海老錠は正倉院御物をもとにして製作した。



第5図　塼積基壇建物・目隠塀A

築地片庇廊および築地　官衙の四周を基底幅1.8m（6尺）の築地がめぐっている。このうち塼積基壇建物の北と西のみは，鍵の手に築地内側に庇がつけられている。庇柱は自然石製礎石上にたち，廊下床面には塼が敷かれる。

築地片庇廊の屋根形式には次の3つの案が考えられた。1）庇をとりこみ棟を梁間の中央に通す。2）棟を築地の中心に通し，庇側の屋根流れを長くする。3）本瓦葺の築地に板屋根の庇部分をさしかける。

今回は第3案により作製し，庇屋根は法隆寺金堂裳階にならい大和葺とした。第3案を採用した主な理由は，1）南北方向の築地と東西方向の築地は同時期に構築されたが，西面築地の柱割りから考えると施工の順序に2段階あり，西面をつくってから北面をこれにとりつけたと考えられる。2）庇柱の配置から，まず東西方向の庇屋根がとおり，これに南北方向の屋根がかかると考えられる。などであった。

目隠塀A・B　塼積基壇建物の南面および東面の階段の正面にあり，建物内部が直接外部から見えないように目隠しの役目を果している。東側の目隠塀Aは，全長15.48m（51.6尺），基底幅72cm（2.4尺）あり，南端は正庁に，北端は築地片庇廊にとりつく。この塀は中心通りに掘立柱を建て，基底部に塼をこばだてにしていた。実施案は掘立柱を骨組とする土塀で，しかも壁面を桁まで塼を張りつめたものとした。

目隠塀Bは全長5.61m（18.7尺），基底幅72cm（2.4尺）で，塀基底部はAと同じであるが，中の掘立柱はない。したがって外観のみAと類似するものと考えた。なお，A，Bとも実物の1/10で塼を焼成し，これを張ることにした。

以上のごとく，今回製作した模型は，塼積基壇建物を中心とし，四方を塀または廊下で閉された閉鎖的な空間となる部分である。建物1棟ごとは小規模なものであるが，建物群としての建築美がいかされているといえよう。

（村上訒一）

建築遺構調査・史跡整備・測量

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

1　総合調査等

富貴寺総合調査（大分県豊後高田市蕗）　伊藤・牛川　1970年11月

郷土文化財総合調査（宮崎県宮崎市）　伊藤　1970年11月

文化財集中地区総合調査（和歌山県伊都郡かつらぎ町）　伊藤　1971年1月

熊野文化総合調査（和歌山県田辺市）　伊藤　1971年2月

観音寺城跡調査ならびに保存指導（滋賀県蒲生郡安土町）　伊藤　1971年2月

2　建造物・民家等

明日香村集落環境調査（奈良県高市郡明日香村）　伊藤・細見・村上・天田　1970年8・9月

兵庫県下の民家調査（兵庫県三田市周辺）　細見・村上・天田　1970年8月

三仏寺投入堂実測調査（鳥取県東伯郡三朝町）　沢村・細見・村上　1970年10月

妻籠宿保存復原状況調査（長野県木曽郡南木曽町）　沢村・細見・村上・宮本　1970年10月

大宰府周辺遺跡・条坊・民家調査（福岡県筑紫郡大宰府町）　宮沢　1971年3月

3　環境整備・庭園発掘等指導

和歌山風土記の丘整備指導（和歌山県和歌山市岩橋）　牛川　1970年4月

末松廃寺整備指導（石川県野々市町末松）　牛川・河原・藤原・村上　1970年5月～1971年3月

京都神泉苑発掘調査指導（京都府京都市中京区御池通掘川西入ル）　牛川・藤原・田中　1970年8月

多賀城内城環境整備指導（宮城県宮城郡多賀城町）　藤原・田中　1970年9月

一乗谷環境整備指導（福井県足羽郡足羽町）　牛川・田中・伊東・沢田・菅原　1970年3月～12月

法皇山古墳環境整備指導（石川県加賀市勅使町）　牛川・田中・沢田　1970年12月～1971年3月

4　写真測量

フゴッペ洞窟写真測量（北海道余市郡余市町）　牛川・伊東・佃　1970年11月

祇園山古墳写真測量（福岡県久留米市御井町祇園山）　伊東・佃・黒崎　1970年12月

大宰府都府楼正庁西南部回廊跡写真測量（福岡県筑紫郡大宰府町）　伊東・黒崎　1970年12月

夜須町八並遺跡　弥生式群集墓写真測量（福岡県朝倉郡夜須町）　伊東・黒崎　1970年12月

難波宮後期大極殿跡写真測量（大阪府大阪市東区法円坂町）　牛川・伊東・田中　1971年3月

高山寺所蔵釋摩訶衍論論義草紙背文書

歴史研究室

高山寺（京都洛西栂尾）には多数の聖教類が蔵されていることは著名である。その中第139函には聖教の断簡が多数収められているが，これまで未整理のままになっていたため，ひとまず応急の整理を行ったところ，紙背文書をもつ論義草かと認められるものの断簡が多数含まれていることが明らかとなった。その体裁には，袋綴装と巻子装の二種類があり，又料紙の寸法にも相違がある。しかしその筆跡は同じであり，しかもその本文は「問云々」とあって問答形式をとり，同じ性格の本と考えて差支えないようである。その中の一つには「釋摩訶衍論巻第十」の内題があり，又その表紙にも「第十」とあって，それらは体裁に相違はあるにせよ釋摩訶衍論の論義草と考えて差支えないのではなかろうか。なおその奥書は次の如くである。「建仁二年七月二十九日未時書了

生年二十四　　仏子祐覚本也」

又巻子装の中にも，（巻次未詳）

「建久七年丙辰正月二日巳日於五室房午時書了」

の奥書があり，これらはいずれも建久年間末頃から建仁二年頃の数年間にわたって，書かれたようである。

その紙背文書中には文治・建久・建仁等の年号のものも見えており，書写の時期に比較的近い頃の文書のようである。論義草紙背文書の数は少くないため，ここでは特に内容上注目すべきものを11点選んでここに紹介する。なお文書名の下の（　）内の数字は，現在原本に付けられている整理番号である。

（1）には粉河寺の二月千手会のことが見えている。（3）の「尊勝院御房令補別当給て候へとも」とは，東大寺尊勝院弁暁が東大寺別当となった時のことで建久10年のものであろう。雑賀庄は紀伊国海部郡にある。（4）の「当寺鎮守八幡」とは東大寺八幡宮のことである。又「大仏四天之御拝見大切候歟」とあるのは，復興なった大仏を拝見することを薦めたもので興味深いものである。又（5）は伊賀国柘植庄関係のもので，大仏のことも見えている。（6）には「あけちのみたう（御堂）」修理の勧進のため，まず「国の守護のみたち」へ行って後，「国中の大名のとのはら」以下に奉加を求めようとしたことが記されている。「あけちの御堂」所在の国名は詳かにしえなかったが，国における勧進に際してまず守護のもとへ行ったということは，国内における守護の権威がいかに大きかったかということをよく物語っている。守護はその国の国衙在庁に対する指揮権をもっていたが，その権威を籍りることは在庁以下有力領主層に対する勧進などを成功させる上においても重要なことであったようである。（7）には河内国貴志庄のことが見えている。（8）についてはなお文意の明瞭でないところがあるが，父親と娘婿との関係が見えている。又「夜田苅」はすでに鎌倉時代初期に罪科の一つとされていたことが知られる史料である。又（9）（10）（11）は替米，借米，借銭に関する史料の一つである。

（田中　稔）

うし候、尤といさゝかの御奉加の候□きに候、
又みから一人してかなう□しく候しかは、も
り沢おんつかゐに□うしつのて候しかは、け
た□□すり□□

（中欠）

□お□やうくきたてつかまつるへきよし□
□ふひま□く候ひつるところに、おんつか□
もり沢くたり候はぬあゐた、たひ〳〵さ□つ
かまつり候ひて、ことしかなはす候、みか□と
しまかりよりて候うゐに、もり沢お□使ひま
かりくたり候はすは、かのものゝく□つらに
くちうせ候ひなんすとおほえ候、□まゐてこ
よのとき御威のすゐを□、このみたうを修
理つかまつり候はんと□し候ゆへに、もり沢
をんつかゐかまかり□たり候へかしと、おと
ふたまゐ候ニ候、□とおきあゐたにて候へ
は、諸事一々ニくはしくまうし候はす候て、
後々日委□申候、恐々、

十二月六日　　僧運西申文

進上預所殿御館

(7) **氏名未詳書状**（後欠）（四―一五）

御文委承給候了、又注文一通拝見仕候了、万
事故御房之御非常以後ハ、偏貴房恐候トモ、
師請上ニ、父母トモ憑まいらせて候、阿闍梨
御房ニハ御料飯ハカリニテコソ候、當国候天
白黒明候天、如形所ヲ沙汰仕候モ、偏貴房御
トクニ候也、後にともかとも貴房之ヲホシメ
サムサマニ候ヘシ、但佰ニヒトツモ御處分候ハ
、水栖之□内石手畠北二段、貴志御庄ニ阿闍
梨御房御坐時たはんと仰候き、若虚言ヲ申候
ハ、仏神ノニクマレカフリ候ヘシ、貴房王□
房ハナチマイラセテ、禅聖御處分候マントハ
、何人の候ニカ候ラム、不審候事也、善悪申
ヘキニ候寸、貴房ノ御ハカラヒ候ヘシ、又今
二三日間令参候天、委細申上候ヘシ、又此明
音房候ヘシ、又弘田巧音分

（後欠）

(8) **僧某申文**（五―四）

（端裏充書）

「□□□□□□□□□□□□申文」

一立行カムコ五郎ト申候男ハ、去年ノ九月ニ
自身ハ不堪□身ニテ候ヘハ、コノ男ヲ可仕
御由候シカハ、ツホモチニモ召仕ワシマシ
候、然ニ立行所労ノ者ニテ候ヘハ、万事ム
コヲタノミテ田地分作セ候、依之丁寧ニワ
ラヒヲホリ、田ヲ作養候處、薬王丸名一段
大之内、一段ハムコノ分ニ定候了、此月ニ
メヲサリ候時、ムコ并ムスメヲ出□候時、
件田ヲ返シ取ト相論仕候、然ニ仰ヲ相待候
間、或ハ五郎房ヲ夜田カリタリト申、或ハ本
ノメヲウチクエフミテ候、一々ニ以外ノヒ
カコトニテ候、鼻三君ノモトヨリ消息候、
コラム候ヘシ、當時ハ各御聞苦モ□候トテ、
鼻三君ヲモコシラヘテ候、稲ハ随□候ハム
トテ置テ候、タヒ候ヘシ、鼻三君ハツヨク
申サレテ、各立行カ□煩可候歟、
一鏡持ハ土屋ノ具足ヒキハタラカサレ候ト□
□奉返之由申候、敷板ハコホチテ候、持仏
堂□ノキ曽木ヲコホチ可返之事ニ候ラ
ム□

九月一日　　□

(9) **明慶書状**（七―一八）

恵光房ノ便ノ日記不給候之已前ニ、四石五斗
ノ供米ヲハ南宗カ米ニ四斗六升、山東ノ倉ノ
預カ不ル申先ニ六斗倉ニ留テ候、ソレモ今一
斗余ハ不足ト申候也、随善登テ可沙汰仕事ニ
候、恵光房ノ借文ニ五斗立用、コレソ今度ノ日
記ニハ不注候、　万徳カ替米、明慶カ替米、
手代ト皆如数記候了、其残ハ候也、小豆ノ四
斗下テ候也、謹言、

二月廿日　　明慶上

(10) **僧徳□米借文**（七―二〇）

謹辞　借請米事
合壱石伍斗者
右件米、以来年夏季供米、可返納之状如件、
建久三年十二月卅日　　僧徳□
（花押）（○11号ト同ジ）

(11) **僧立珍米借文**（八―二）

（端裏書）

「恵光房三斗」

謹辞　借請米事
合伍斗者
右件米、以所下時可弁進之状如右、
建仁二年五月六日　　僧立珍
（花押）（○10号ト同ジ）

此料不候故如此申候、到来御米若一石之所
下候歟、仰候故五斗借文入候也、

釋摩訶衍論論義草紙背文書

(1) 僧隆西申文（一―五）

（端裏充書）
「　　（切封）
謹上　実厳御房まいる　　僧隆西申文」

廿日之比ニクタリ候ヘキニテ候也、クハシキ事陽寿申候ヘシ、粉河寺ノ二月千手会ノ舞ヲ、陽寿ニセサセ候ハヤト思給候、如何幼少当初ヨリ観音命助ニテ候、尤可然候ト思給候也、可然候ハヽ、正月御山も世間大事に候覧、□此陽寿をまいらせ候こそ返々無心候へ、此石定法師か朝夕食物不令持候、返々浅猿候、不及力候也、大事ハ如形事ハ成して候か、餓死一定の事に候也、万事計略盡て候也、御山へハ諸国より物の上候へハ、諸事心にくゝ候、もし借物なと候はん時ハ、小分なりともたつねて可給候也、見参之時如令申候、此小童ハ御心にあかせおハしまさゝらん、きはういかにも〳〵御教訓候て、学文をも行をもせよとヲホせ候へく候、ヲヤノコヽロイカヽト不可思召候、アナカシコ〳〵、又モシ二三日ヤシナハセヲハシマシ候ナンヤ、入堂ヲ仕候ハヽヤト思給候ニ、一昨冬候ハム、一切粮料も候ハネハ、エヲモヒタチ候ハヌニ候仁事者、石定法師可令申候也、

十二月廿八日　　僧隆西申文

(2) 僧円入貢上状（一―一三）

貢上
　僧円入
右進上如件
文治元年五月十三日

(3) 僧隆玄書状（一―一九）

―　（前欠）　―

大事ニ候者、日比を使人ニ可仰給候、十市庄より可沙汰進候也、又来月御影供之比ハ、相構天参せはやと思給候、御退出又大事ニ候者、其時まれ可申承候也、いそき思召事ならは、今月必々可令渡給候也、早々使人ニ委可仰給候、

尊勝院御房（并脱）令補別当給て候へとも、為隆玄別慶賀なく候□下司目代と申ことは、雑賀庄の上ニ副給て給へとも、無指得分候事□候へハ、いかにても候なん、其間事も見参ニ申候へく候、恐々謹言、

六月十八日　　隆玄

（切封）
実厳御房　御返事　　隆玄

(4) 氏名未詳書状（後欠）（一―二〇）

かならす〳〵　此賢恵房上人ハこれニテより
此人しるし　年来の知人ニ候、而依所労参
よく〳〵さし
て可令進給候、詣のしるし申語と被申候也、余
あなかしこ
〳〵　人のをハさゝせたまはすと□
今月四日御消息慥以拝見、不審之處、悦承候了、
参詣候事、今月中ハ旁指合候之間、不可叶候也、常楽会之間、京下之人雑事ゆ見沙汰仕事候、又自廿日當寺鎮守八幡春季御八講五ケ日出仕候之間、今月ハかた〳〵恐々無極候也、可被仰合事何事候哉、尤不審候、此月之月中ニ可被仰之事仁天候者、白地ニ御退出候へかし、且ハ大仏四天之御拝見大切候歟、伝馬なんとも其方ニて

―　（後欠）　―

(5) 心阿弥陀仏書状（二―八・九）

（懸紙充書）
「柏植御庄預所殿まいる　　心阿弥陀仏上」

今日たまはり候て明日可進上申候也、わさと令申候、當御庄之所當不熟駄賃なんとを訴候ひしあひた、いまに不令運上候、より て令申候也、御領内したゝかに候はん馬十二十疋はかりたまはるへく候、駄賃かきり候ことに候、いそきたまはり候へきに候、かやうの事を申候ハ、きやめてはゝかり候ことに候へとん、且大仏のをんみやつかひニおほしめしてたまはるへく候、けむちむををろしたふへく候、恐々謹言、

十二月廿日　　心阿弥陀仏（花押）

(6) 僧運西申文（二―二〇・二一）

毎年の勤行とつかまつり候うゑに、ことしのをんいのりにやくしく百座并仁王経百部仁王講百座勤行つかまつりて候、その巻数まいらせあけ候、

その中ニ殊ニ申上候あけちのみたう修□（理カ）事、召候はぬあゐた、无縁のひしりをすゝめ□（聖）（候カ）、奉加の帳をつくりて、国の守護みたちをはしめまいらせ候ひて、国中の大名のとの□（は）らをすゝめまいらせ候へは、あけちのみたうの事ニハ尤と、あつかり所とのゝ御奉加ある□し、そのときにおの〳〵ほうかすへきよし、大名のとのはらお□候、さりなからみたち（た）は奉加候、国中をあまねくすゝめ候はんか□めにま

『七大寺巡礼私記』の 研 究

美術工芸研究室・建造物研究室・歴史研究室・平城宮跡発掘調査部

前年度よりの継続研究である。『七大寺巡礼私記』の註解作製を主目的として，美術工芸・歴史・考古・建築の各分野共同して，記事の逐語的検討を行なうと共に，12世紀以前における南都七大寺の復原的研究を進めた。本年度は前年度に引続いて興福寺・西大寺・元興寺・唐招提寺（一部を残す）について一応の検討を加えた。昨年度発見された『十五大寺日記』逸文をもとにして，本年度は『巡礼私記』以外の縁起類との比較検討を行なったが，『興福寺流記』と『十五大寺日記』との間に何らかの関連が存在する可能性が考えられるに至った。これによって『巡礼私記』成立については更に文献学的研究を深めることができた。他の縁起類との比較研究については今後の重要な課題である。

なお資料の調査収集については『東大寺絵画目録』作製を始めとする七大寺所在の美術工芸品古文書類の調査を行なった。また七大寺以外に所在する資料についても調査を進めたが，その中には神宮文庫本『建久御巡礼記』や高山寺所蔵古文書聖教類中の南都諸寺関係資料等がある。

なお本研究は文部省科学研究費補助金（総合研究A　研究代表者　松下隆章）を受けた。

典籍古文書調査

歴史研究室

本年度実施した典籍古文書調査中，主なものは次の如くである。

南都諸大寺関係古文書等の調査研究　〔興福寺〕『造興福寺記』（平安時代写本，紙背文書とも）並びに第19・20・22・23函の調査を行い，マイクロフイルムによる写真撮影を行なった。〔唐招提寺〕『唐招提寺史料』第1（奈良国立文化財研究所史料第7冊）を出版した。

高山寺所蔵古文書聖教類調査　数次にわたって高山寺所蔵の古文書を中心にして調査並びに写真撮影を行なった。第120・155・172～175函・補遺第3函所収の古文書並びに第139函所収紙背文書（一部は先に掲げた）及び五部大乗経紙背文書の一部（第37函の一部・第54函）をマイクロフィルムに収めた。また聖教類についても史料価値の高いもの若干点を選んで撮影を行なった。

その他の古文書典籍調査　〔神宮文庫〕山中文書（内約300通）・類聚神祇本源・御鎮座伝記・御鎮座本紀・元亨三年御遷宮記（以上紙背文書共）・氏経卿引付・御塩殿古文書その他古文書・記録類の調査並びに写真撮影を行なった。

〔金光図書館〕『法曹至主要抄』断簡及び具注暦断簡類を調査した。

平城宮跡・飛鳥藤原宮跡発掘調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部は，平城宮跡において，第63～71次にわたって発掘調査を実施した。第63・71次は宮域西辺の馬寮地区，第69次の調査は宮中央部の推定第一次内裏，第70次の調査は推定第二次内裏東外郭部についておこなったものである。第59次の調査は昨年度末におこなったが，第63次の調査区と隣接し，同一官衙にあたるので，今回一括，報告した。第64～68次の調査は現状変更にともなう事前調査である。第68次の調査地点は，宮外であるが，平城宮東院推定地の南に隣接する京域である。完全な調査が望まれたが，業者の充分な協力が得られず，小地域の発掘調査にとどまり，破壊されてしまったのは残念であった。そのほか，第64次以外の調査は，発掘面積が狭く，遺構の性格が明確でなかったため，今回の報告では割愛する。

また，飛鳥藤原宮跡においては，小治田宮推定地・豊浦寺跡・雷丘東方遺跡・藤原宮跡第2次の発掘調査を実施した。小治田宮推定地の発掘は明日香村豊浦地区の水田中にある「古宮土壇」の周辺部で行ない，宮跡と推定できる遺構を確認した。豊浦寺跡と雷丘東方遺跡の発掘調査は現状変更にともなうもので，後者は飛鳥浄御原宮推定地の西辺にあたる。藤原宮跡第2次の発掘調査は，朝堂院回廊東北の外側域においておこなった。各次別の調査面積・期間・遺構の規模・時期については第1表を参照されたい。

調査次数		調査地区		調査期間	調査面積
平城宮跡	63	6ADC—G·H·L·M	馬寮北域	1970. 5. 1 ～ 1970. 7.27	44.6a
	64	6ALC—W 6ALD—A	平城宮東張出部東辺	1970. 4.16 ～ 1970. 5.16	1.9
	65	6AAN—M	内裏北方官衙地区	1970. 5. 8 ～ 1970. 5.12	0.3
	66	6AFB—F·H	左京一条三坊十五坪	1970. 5. 7 ～ 1970. 5.23	2.5
	67	6ACO—A	宮城西北部	1970. 7. 1 ～ 1970. 7. 4	0.9
	68	6ALG—A·B	左京二条二坊六坪	1970. 7.10 ～ 1970. 7.20	5.5
	69	6ABP—A·B·D	推定第1次内裏	1970. 8. 3 ～ 1970.11.21	34.15
	70南	6AAE—N·M	推定第2次大極殿東外郭	1970.11. 1 ～ 1971. 1.25	31.2
	70北	6AAD—G	推定第2次内裏東外郭	1971. 1. 6 ～ 1971. 3.10	17.0
	71	6ADD—Q·N 6ADE—A·B·K	馬寮南域	1971. 2.16 ～ 1971. 5.11	40.0
飛鳥		5AOH—J·H·I	小治田宮跡推定地	1970. 5.20 ～ 1970.11.11	21.4
		5BTU—K	豊浦寺跡	1970.12.14 ～ 1970.12.25	1.0
		6AMO—O	雷丘東方遺跡	1970.12.15 ～ 1971. 1.30	5.0
藤原宮跡	2	6AJF—E	藤原宮大極殿東方	1970. 7.15 ～ 1970.11.30	12.0

第1表　1970年度発掘調査状況

馬寮北域（第59・63次調査）　調査地は1968年度の４回の調査で馬寮と推測した宮域西北部の西面北門に近接する地域である。検出した遺構は掘立柱建物33，柵５，築地２，溝10などである。これらの遺構は柱穴の重複関係などから４期にわけることができる。

Ａ期は，この地域に大規模な造営を行なった時期で，調査地域西端を南北に走る柵ＳＡ3680と同じく東端を南北に走る柵ＳＡ5950によって東西を画されている。これらの柵は第25次，第47次，第50～52次調査で検出したものの北延長部にあたる。ＳＡ3680は今回24間分を，ＳＡ5950は23間分を検出したが，両方とも北端はさらに調査地域外にのびている。ＳＡ3680の西約10mのところに西面大垣の側溝と犬走りの一部を検出した。ＳＡ5950に直角にとりつく築地ＳＡ6475は官衙の北を限るものである。入隅には築地の下に木樋の暗渠が設けられており，築地に沿って走る北側の溝に流れ込んでいる。またこの築地の北にある平坦地ＳＸ6502は宮域西面北門から東に延びる道路にあたる。

調査地域中央部で検出した掘立柱建物ＳＢ6450は桁行７間，梁行４間の南北に廂のつく東西棟の建物で，その位置や規模からみて，この官衙の正庁と考えられる。この建物の北にある東西棟の建物ＳＢ6469は桁行４間分を検出したが，さらに西方へ延びている。南北棟ＳＢ6425は，当初桁行７間，梁行２間の規模であったが，のちに改造されて，北に６間分をつぎたして，13間になったと考えられる。

調査地域東部では柵の東を南北に走る築地ＳＡ6150を検出した。この築地は西側の築地ＳＡ6475のほぼ東延長線上で東に折れ曲り、調査区域外へのびている。この築地は第37次調査で検出した官衙のそれぞれ西・北を限るものである。この築地の東にある南北棟の建物ＳＢ6487はこの時期と考えられる。またそれぞれの官衙を画する柵ＳＡ5950と築地ＳＡ6150との間を南北に走る幅約9.5mの空間地は二つの官衙の間を通る道路と考えられる。

Ｂ期には，Ａ期の柵ＳＡ3680をとりのぞき西面大垣に至る範囲まで広げて利用している。ＳＢ6400は東西に廂のつく南北棟で桁行11間，梁行４間分を検出した。調査地域中央には柱通りをそろえてＳＢ6185・6195・6385の3棟がある。いずれも第52次調査で東半分を検出しており，今回の調査で全規模

	遺構		柱間数	柱間寸法 桁×梁	備考
A期	ＳＡ3680	南北柵	24以上	2.7	
	ＳＢ6425	南北棟	13×2	3.0×3.0	
	ＳＢ6450	東西棟	7×4	2.9×2.9	南北廂
	ＳＢ6469	東西棟	4以上×2	2.6×2.4	
	ＳＢ6487	南北棟	5×2	2.7×2.7	
	ＳＡ5950	南北柵	23以上	2.6	
	ＳＡ6475	築地			巾3m
	ＳＡ6150	築地			巾4m
B期	ＳＢ6185	東西棟	7×3	3.0×3.0(3.9)	北広廂
	ＳＢ6195	東西棟	7×2	3.0×2.4	
	ＳＢ6360	南北棟	8×3	2.1×2.1	
	ＳＢ6385	東西棟	7×2	3.0×3.0	
	ＳＢ6400	南北棟	11以上×4	3.0(3.4)×3.0	東西広廂
	ＳＢ6172	南北棟	9×2	2.8×3.0	
	ＳＢ6385	東西棟	7×2	2.7×2.7	
	ＳＢ6430	東西棟	13以上×4	2.4×2.8	
	ＳＢ6454	南北棟	4×1	2.7×4.5	
C期	ＳＢ6190	東西棟	5×2	2.9×2.4	
	ＳＢ6381	東西棟	5×1	3.0×3.0	
	ＳＢ6401	南北棟	7×4	2.4(3.3)×2.7	東西広廂
	ＳＢ6420	東西棟	6×3	3.0(3.3)×2.4	南広廂
	ＳＢ6175	南北棟	21×4	2.4×2.4	東西廂
D期	ＳＢ6460	南北棟	5×4	2.7×2.7	東西廂
時期不明	ＳＢ6330		3×3	1.8×1.5	総柱
	ＳＢ6340		3×3	1.8×2.1	総柱
	ＳＢ6345	南北棟	6×2	3.6×3.6	
	ＳＢ6403	南北棟	6×2	3.0×3.0	
	ＳＢ6410	南北棟	2以上×2	1.5×2.4	
	ＳＢ6451	南北棟	5×2	3.0×2.6	
	ＳＢ6453	東西棟	3×2	1.9×2.6	
	ＳＢ6464	南北棟	2×2	1.8×1.8	
	ＳＢ6500	南北棟	4以上×2	2.6×2.7	

第２表　馬寮北域の主要遺構

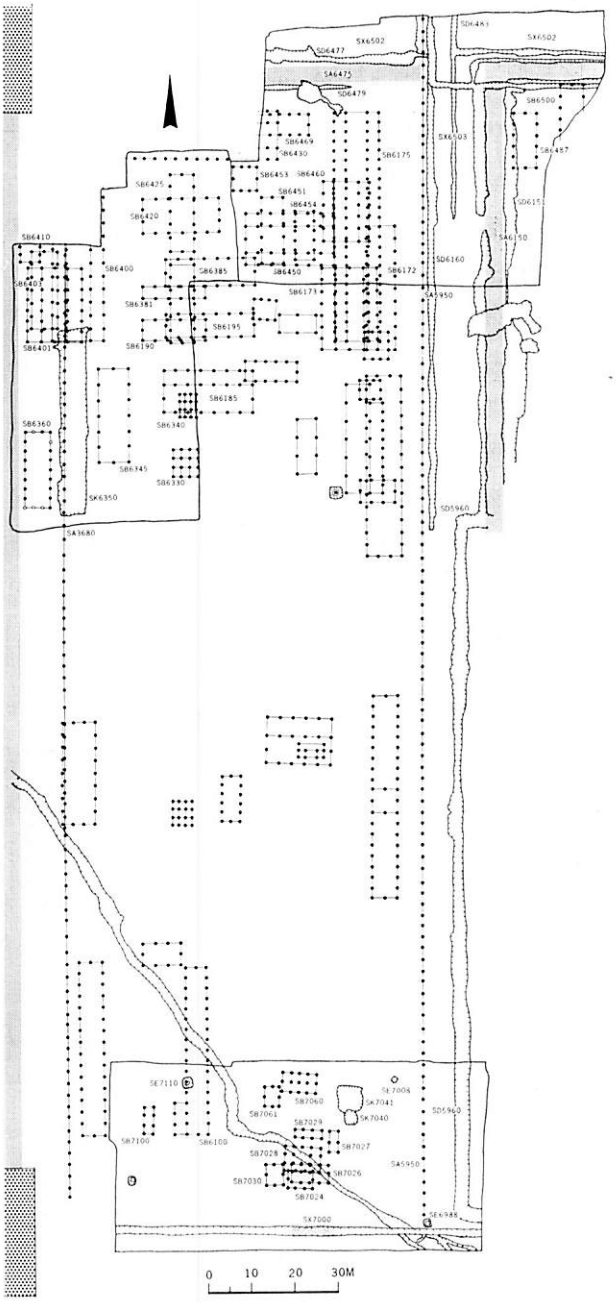
があきらかになった。A期ＳＢ6450のあとには小規模な南北棟ＳＢ6454があるのみである。南北棟ＳＢ6172は第52次調査で南半分を確認していたが，桁行９間，梁行２間にまとまった。ＳＢ6430は４間の梁行に桁行13間以上の東西棟である。

調査地域西南隅にあるＳＢ6360は，内部周辺より焼土，炭化物，フイゴの羽口，鉱滓などが出土し，鍛冶工房と推定される。この工房の東側には南北43m東西６mの長方形の土壙ＳＫ6350がある。この土壙中にはＳＢ6360の廃棄物が大量に埋まっている。

Ｃ期にはＢ期と類似した建物配置をしている。ＳＢ6401は桁行７間，梁行４間の南北棟である。調査区域中央部付近には柱通りをそろえてＳＢ6381・6190の２棟がある。さらにＳＢ6381の北には桁行６間，梁行３間の東西棟ＳＢ6420がある。ＳＢ6175は第52次の調査で南端部を確認していたが桁行21間に及ぶ南北に細長い建物であることが判明した。

Ｄ期に属する建物は東西に廂のつく南北棟ＳＢ6460の1棟である。

そのほか，時期不明の建物ＳＢ6453・6451・6464などがある。



第１図　馬寮遺構配置図

出土遺物は量が少ない。土器は「主馬」・「内厩」と墨書したものがそれぞれ１点ずつ出土した。ほかに，木簡15点が出土した。中でもＳＤ6483に東から流れこむ東西溝ＳＤ6499から出土したものに，嶋（庭園）を掃き清めるために兵士を進めた記録の断片があわせて５点ある。

馬寮南域（第71次調査）　調査地は西南中門の東，第25次の調査地に接するところである。この地域はさきの第63次調査同様「馬寮」の一部であり，西面中門の関係からその南の境界が推測されるところである。

検出した主な遺構は掘立柱建物・柵・溝・井戸などである。

調査地域東部の柵ＳＡ5950は，官衙の東を画するもので，今回13間分を検出するとともに，その南端を確認することができた。またこの柵ＳＡ5950の東８ｍのところを平行して，南北に走る溝ＳＤ5960は柵の南端のほぼ延長線上で東に折れる。調査地域西北にある南北棟ＳＢ6100は第50次調査で，桁行16間，梁行２間の建物であることが判明していたものであるが，今回の調査によって西側の柱列の南から３間分だけ廂がつくことが判明した。調査地域南辺のほぼ中央部で一部分であるがバラス敷面を確認した。これは西面中門より東に通じる道路敷の一部分と推定される。

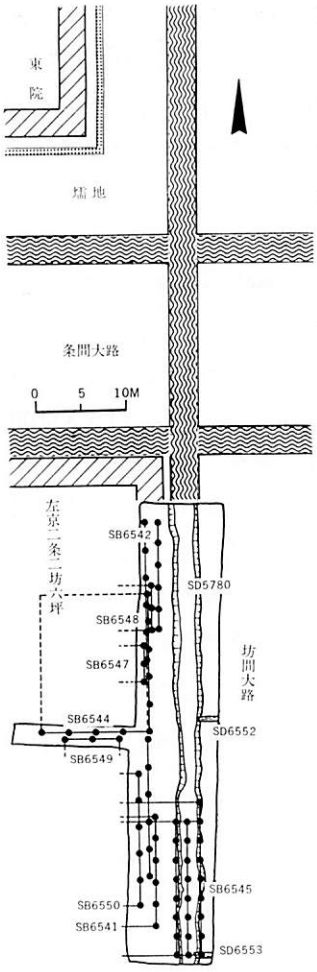
以上にあげた遺跡のほか，平安時代に属する井戸４基，調査地中央では時期不明ではあるが小規模な各種掘立柱建物が重複した状態で検出された。また平城宮以前の遺構として弥生時代・古墳時代の穴や溝がある。出土遺物は瓦・土器が主なものであるが，他の地域に比較して量は少ない。瓦では藤原宮式がめだつ。

以上，７次にわたる発掘調査で，掘立柱建物・柵・築地をはじめ多数の遺構を検出した。建物群は数回にわたる造営が認められるが，これらはすべて築地と柵に囲まれた区画内にある。しかもこれらの建物群は主に区画内の北部に集中しており，中央部は広い空間となっている。また建物には桁行が14～21間という宮の他の地域では見られない非常に間数の多いものが集まっていることはこの地域の特色といえる。これらの建物が東西を84m（28丈）をへだてて南北に走る柵ＳＡ3680とＳＡ5950，北は築地ＳＡ6475で囲まれていることは先述のとおりである。南については西面中門からの道路の一部と思われるバラス面及び東の柵ＳＡ5950，西の柵ＳＡ3680とでは若干の出入りがあるが東の柵の南端を境界と考えると南北は254m（84丈）になる。

	建物		柱間数	柱間寸法 桁×梁	備考
奈良	ＳＢ 6100	南北棟	16×2	2.4×2.4	西側南寄３間分に廂
平安時代	ＳＢ 7024	東西棟	3×2	2.0×2.0	
	ＳＢ 7026	東西棟	4×2	2.1×2.0	
	ＳＢ 7027	南北棟	2×1	2.4×2.4	
	ＳＢ 7028	東西棟	4×3	2.1×1.9	
	ＳＢ 7029	東西棟	3×1	2.1×1.8	
	ＳＢ 7030	南北棟	2×2	2.0×2.0	
	ＳＢ 7060	東西棟	4×2	2.0×2.1	
	ＳＢ 7061	南北棟	2×2	2.2×1.6	
	ＳＢ 7100	南北棟	3×1	2.1×2.1	

第３表　馬寮南域の主要遺構

以上のような官衙ブロックについては，すでに1969年度年報において報告し，これを主馬寮と推定した。今回の発掘調査と一連の調査における出土遺物の整理の段階で，新たに墨書土器「内厩」２点，「主馬」１点を発見した。この発見によって少なくとも奈良時代末期に主馬寮・内厩寮[註1]なる官司が置かれたことがいっそう確実視されるに至った。以下，主馬・内厩両寮について若干述べる。内厩寮は天平神護元年（765）２月，近衛府の設置と同時におかれた官司で，任官記事からみると近衛府官人との兼職が多い。また，主馬寮は設置年時を詳かにできないが，頭，助の任官は天応元年（781）が初見である。一方，令制の左右馬寮は宝亀



第2図　左京二条二坊六坪遺構配置図

10年(779)，左馬頭正月(牟都支)王の任官を最後に大同3年(808)まで史料には見えないことから，左右馬寮は主馬寮に統合されたものといえよう。

このように奈良時代末に設置された内厩，主馬両寮は大同3年に廃され，もとの左右馬寮が復活するのである。上述のとおり，主馬，内厩と墨書された土器の発見によって，奈良時代末には両寮がこの地域に存在したことが確定的であるし，発見遺構の重複関係から奈良時代を通じて同規模の官司が存在していたことが判明する。平安宮古図によれば，おおよそのところ宮域西方の位置に左右馬寮があり，発掘調査による官衙の規模もほぼこれと一致している。

平城宮東張出部東辺（第64次調査）　この調査は住宅建設にともなうものであるが，この地は宮の東西大垣及び宮城門が想定される地域である。発掘調査の結果，宮城門想定地については凝灰岩の散乱を一部確認したにとどまり，門跡と見られる確かな遺構は検出できなかった。

東大垣については築地本体の痕跡は検出できなかったが，大垣の外濠と考えられる幅1.2mの南北溝を検出した。

左京二条二坊六坪（第68次調査）　ボーリング場建設にともなう緊急調査として，東院東南隅に隣接する地域で行った。すでに第44次の調査で明らかにされている条間大路西側溝の南延長上に設定した東西10m，南北50mのトレンチで建物8，柵4，木樋暗渠2などを検出した。

大路西側溝ＳＤ5780の西では建て替え，削平がはなはだしく，第44次調査で推定した築地の痕跡は認められなかった。この溝と重複してＳＢ6545がある。桁行8間以上，梁行2間以上をかぞえるが，溝と同時期の可能性があり，溝上に張り出しをもった建物であろう。ほかの建物はすべて築地推定線に東側柱，妻柱などをそろえて建てている。また柵ＳＡ6543も築地推定線上にのっている。木樋暗渠2条のうち，ＳＤ6553はＳＢ6545より新しい。

遺物は溝ＳＤ5760より土器・木器・瓦・木簡など多量に出土した。東院に多くみられる三彩陶器や緑釉瓦，「東隅」・「東南隅」などの墨書土器，竪櫛・斎串などの木製品，他に和同開珎・万年通宝・麻布・漆曝布などがある。

木簡も79点出土した。内容的にはまとまったものはないが，「憶漢月萬里望向関」と記したものは日本漢文学史上貴重なものといえよう。また，大和国添下郡からの米の貢進札，嶋主なる人物が銭出挙したきの記録などに注目すべきものがある。

推定第１次内裏（第69次調査）　調査地域は，推定第１次内裏跡（口絵）で，推定第２次内裏後宮西方に並行する位置にあたる。推定第１次内裏については，これまでの第７・27次の調査で外郭を画する築地回廊が確認されているが，今回，新たに築地回廊内の主要な一郭が明らかとなった。検出した主な遺構は，掘立柱建物13・礎石建物２・塀１・塼積段・階段などで，前後４回の造営期にわかれる。

Ａ期　調査地域南に段ＳＸ6600（口絵）がある。この段は北から南へゆるく傾斜する地形の南部を削平して作っている。段は現状で1.5mの落差があり，70度の傾斜がある。斜面は塼を横積みにして化粧している。現存する塼積みは最も残っているところで７段ある。もともとは，段の落差は2.5～３m程で，30～40の段塼を積み上げていたと思われる。今回の調査では，ＳＸ6600は東西63mを検出したが，東西両端は調査地域外にのびている。段ＳＸ6600の基底部は推定第１次内裏回廊内を，南北にほぼ３等分した線上にあり，この一郭の南限を画している。段ＳＸ6600の南前面一帯は砂利を敷きつめている。また，この段には，朱雀門中軸線の延長上にあたる部分に，木製の階段ＳＸ6601（口絵）がとりついている。建物はこの階段をのぼった正面約９mのところ，同じ中軸線上に位置して，正殿風建物ＳＢ6605がある。Ａ期の建物は，のちの削平がいちじるしく，確認できたものはこの１棟だけであった。

この時期の遺物は，土器と瓦があるが，極めて少量であった。とりわけ瓦の出土が少ないのはこの地域の建物が瓦葺以外のものとみられ，この一帯の遺構の性格を推測させるものがある。

Ｂ期　塼積段の前面に置土して，敷地を南へ拡張し，北面の築地回廊もつけかえるなど，この一郭の敷地全体を南へずらしている。同時に，建物も全面的に建て替えているが，それらはすべて10尺方眼地割にのって整然と配置されている。正殿となる東西棟建物ＳＢ6610は桁行９間，梁行９間以上の建物で，朱雀門からの中軸線上に位置している。奈良時代の建物でこのような建物を考えることは，技術的に難しく，前後２棟にわかれるものと考えた方がよいであろう。（1971年度の第72次調査で、この建物は全規模が明らかになった。それによると３棟の建物が軒を接して、前後に並んでいる。）このＳＢ6610の東妻柱列よりちょうど60尺離れた

	遺構		柱間数	柱間寸法 桁×梁	備考
A期	ＳＢ 6605	東西棟	7×2以上	3.0×3.0	
B期	ＳＢ 6610	東西棟	9×9以上	3.0×3.0	
	ＳＢ 6640	東西棟	3×2	3.6×3.0	
	ＳＢ 6650	東西棟	3×3	3.6×3.0	
	ＳＢ 6655	南北棟	3×2	3.0×3.0	
	ＳＢ 6656	南北棟	3×2	3.0×3.0	
	ＳＢ 6660	東西棟	7×4(5)	3.0×3.0	南北廂
	ＳＢ 6663	東西棟	7×5	3.0×3.0	南北廂
	ＳＢ 6666	東西棟	7×2	3.0×3.0	間仕切り
	ＳＢ 6669	東西棟	7×2	3.0×3.0	間仕切り
	ＳＣ 6670	東西廊（？）	6以上	3.9	
C期	ＳＢ 6620	東西棟	9×5	3.0(4.3)×3.0(4.3)	四面広廂
	ＳＢ 6621	東西棟	5×4	2.6×3.0(4.2)	
	ＳＢ 6622	南北棟	5以上×4	3.0(4.2)×3.0	東西廂
	ＳＡ 6623	南北塀	7	3.0	
	ＳＡ 6624	東西塀	9以上	3.0	
	ＳＡ 6625	南北塀	12	3.0	
	ＳＡ 6626	東西塀	6以上	3.0	
D期	ＳＢ 6630	東西棟	7×3	3.0×5.7(3.0)	北孫廂
	ＳＢ 6614	東西棟	3×2	3.0×2.7	北廂

第４表　推定第１次内裏主要遺構

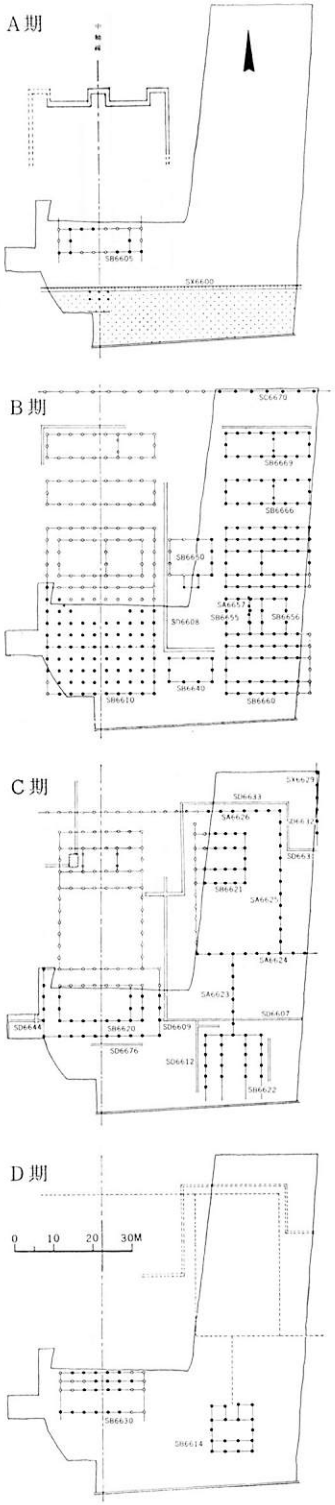
ところで，西妻柱列通りをそろえて，5棟の東西棟の脇殿が，整然とならんでいる。南からＳＢ6660・ＳＢ6655・ＳＢ6656・ＳＢ6663・ＳＢ6666・ＳＢ6669となっている。さらに正殿とこれら5棟の間には，２棟の東西棟建物を配している。このうち南の１棟ＳＢ6640の桁行柱間は，60尺を５等分した12尺となっている。調査区北端には礎石柱列ＳＣ6670がある。推定第２次内裏北面築地回廊南側柱列の西延長上にあり，柱間も一致することから，推定第１次内裏北面築地回廊を南へつけかえたものと推定した。なおこの時期は，のちに東脇殿の小改造をおこなっている。すなわちＳＢ6655・ＳＢ6656が廃されて，目隠塀ＳＡ6657にかえられ，同時にＳＢ6660に北孫廂をつけている。

ＳＢ6663の柱抜跡より多量の軒瓦が出土した。なかでも6732型式（東大寺式）軒平瓦と6282型式軒丸瓦が多い。また，建物配置が推定第２次内裏後宮のＢ期と極めて似ている。

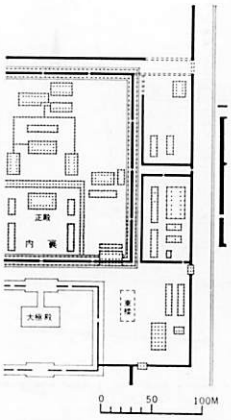
Ｃ期　再び建てかえがおこなわれ，建物配置が全面的に変る。朱雀門中心軸延長上に正殿ＳＢ6620を配置しているが，脇殿はＳＢ6622のみで，しかも南北棟である。北方には後殿風建物ＳＢ6621がある。この建物は廂は掘立柱で，身舎部分は礎石柱となっている。ＳＢ6621とＳＢ6622のあいだには縦横に塀がめぐっている。この時期の建物が，推定第２次内裏Ｃ期と同様に，広廂を特徴としていることから，推定第２次内裏後半の時期，奈良時代末と考えられる。なお，ＳＸ6629は大膳職の真中を走る柵ＳＡ304の南延長上に位置するが，現在のところ柵か，建物か不明である。

Ｄ期　Ｃ期の建物配置を踏襲しているが，規模は縮少されている。その配置から考えて，Ｃ期の塀がそのまま継承された可能性がある。時期は，平城上皇のころと考えられる。

以上のように今回調査した一郭は，内裏と密接な関係をもっていることが判明したが，整然とした建物配置が奈良時代全代を通じて維持されているなど，第１次内裏と第２次内裏の存在をめぐって大きな問題が残されていると言える。今後の調査による解決が待たれよう。なおＤ期の建物が平城上皇の時代の中心的なものであった可能性がある。



第３図　推定第１次内裏変遷図



第4図　内裏及び東外郭配置図

推定第2次大極殿・内裏東外郭（第70次調査）　調査地は，推定第2次大極殿・内裏の東外郭部にあたる南・北2地区である。この調査で，東外郭部のほぼ全域の調査を終了した。

南地区　第33次と第35次の調査区に挟まれた地域で，推定第2次大極殿の東側にあたる。検出した遺構は，築地・礎石建物・掘立柱建物などで，前後3時期に分かれる。

A期　SB7550など3棟の建物がある。SB7550は，すでに第35次の調査で南半分を確認していたが，桁行13間，梁行2間の南北棟にまとまることが判明した。

B期　この地域の中心的な時期で，東面築地SA705に画された一郭に整然と建物が配置されている。礎石建物SB7500はすでに第40次の調査で南半部を確認していたが，桁行7間，梁行4間の大規模な楼風の建物で，西側中央に桁受石があり，木製の階段をつけている。従来東楼跡とされる土壇が西側にあり，この両者の関係が問題となる。SB7500の北側には柱列をそろえて，同一規模の2棟の南北棟SB6700・SB6701が並び，同じく東側にはSB6710がある。この礎石建物を中心にした一郭が，内裏外郭・大極殿回廊，およびいわゆる東楼跡などとどういう関係にあるかは，今後の課題である。

C期　礎石建物の東側一帯を整地しているが，建物は1棟をかぞえるのみである。なお，遺物は土壙などから多量に出土している。とりわけ瓦の出土量が極めて多い。「本直七左…」・「…直三右…」と線刻された塼や三彩・二彩・緑釉陶器などの破片も出土している。

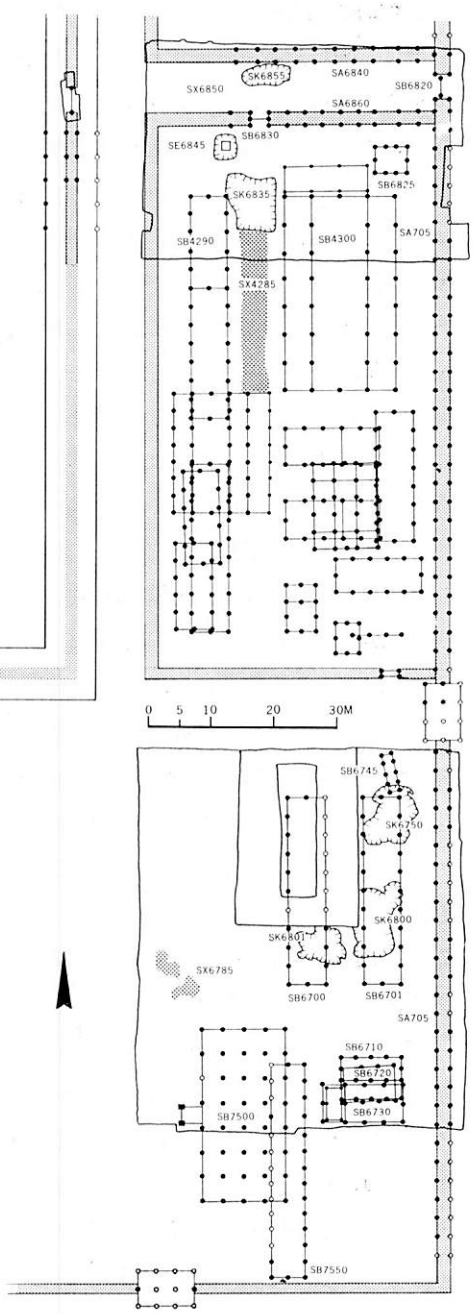
北地区　第21次と第33次の調査区に囲まれた地域で，第2次内裏東外郭部にあたる。調査区東端を南北に走る東面築地SA705は築地本体の積土がよく残存しており，寄柱の穴と積土との関係から数回の改築が認められる。その時期は明らかでない。この築地には門SB6820がついている。この門は，内裏を囲む北面築地回廊と南面築地回廊間心々距離の2等分線上に位置しており，平安宮の建春門にあたる。この門から内裏の東面築地回廊中央閤門(平安宮宣陽門）に通じる幅6mの道SX6850があり，その両側には築地SA6840とSA6860があって，内裏東外郭部を南北に2分割している。SB705とSA6860に限られた南の一郭には，礎石建物SB4300（口絵）がある。第33次の調査ですでにその南半部を確認していたが，今回新たに南北3間，東西4間分の礎石すべてが原位置を保って検出された。柱間4.45mで桁行7間，梁行4間をかぞえ，基壇規模南北34m，東西20mをもった大規模な建物である。また

	遺構		柱間数	柱間寸法 桁×梁	備考
A	SB 6720	東西棟	3×(2)	2.7×2.8	
70期	SB 6745	南北棟	4×1	1.5×1.6	
	SB 7550	南北棟	13×2	2.4×2.4	
次	SB 6700	南北棟	10×2	3.0×3.0	
南B	SB 6701	南北棟	10×2	3.0×3.0	
期	SB 6710	東西棟	4×3	2.3(3.0)×1.9	南広廂
	SB 7500	南北棟	7×4	3.8×3.4	礎石建物 西中央有階
C期	SB 6730	東西棟	4×2	3.0×3.0	3.0×3.0
70	SB 4290	南北棟	12×2	3.0×3.0	間仕切り
次	SB 4300	南北棟	7×4	4.4×4.4	礎石建物
北	SB 6825	東西棟	3×2	1.7×2.1	北土廂

第5表　推定第2次大極殿・内裏東外郭の主要遺構

のちには北側に土廂をつけたしている。この建物の西側には，石敷道路SX4285をへだてて，SB4290が南北に長く建っている。ほかに，井戸SE6845，SB6825がある。SB6825とSB4300の東北隅一帯には炭灰の充満したピット群・溝などがあり，この一郭で金工か鍛冶が行なわれたようである。なお調査区域西端は地山面まで削平されているため，西側の築地を検出することはできなかった。しかし第33・21次調査で検出した東西溝SD4240・SD2350・SD2000が，SA705の心から西へ約47mのところで，おのおの暗渠となっている。したがって，この部分に南北に走る築地が存在したことはほぼ確実であろう。

今回の調査をもって推定第2次内裏大極殿東外郭部のほぼ全貌が明らかとなった。それによると東外郭部は，内裏および大極殿一郭の東に隣接し，築地によって囲まれた南北に細長い敷地をもち，築地・道路等により南北に3分割されている。それぞれの区域には東南廂をもった中心建物を置き，南北棟を主体としている。内裏外郭部は，その北限が未調査で断定はできないが，内裏造営計画線にのって南北に2等分されていることからみても内裏と最も密接な関係をもった官衙であろう。SA705の東を流れる大溝SD2700の上流に「宮内省」等の墨書土器が出土しており（年報1965）宮内省との関連が考えられる。また大極殿東側の一郭が，内裏外郭部とどういう関係にあるかについては今後の調査に待たねばならない。



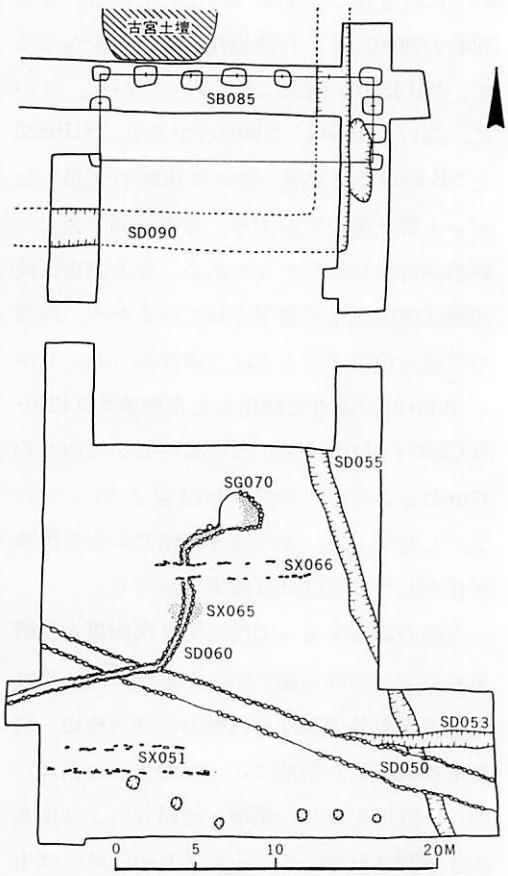
第5図　推定第2次大極殿・内裏東外郭遺構配置図

なお，今年度報告した平城宮跡の発掘調査で出土して木簡の主なものは「平城宮跡発掘調査出土木簡概報（八）」(1971年）に収録した。

註　1　亀田隆之「内厩寮考」続日本紀研究5―5(1958)

（横田拓実・石松好雄・田辺征夫）

小治田宮跡推定地　小治田宮の所在地に関しては，飛鳥岡本宮と同所，雷丘東方の地に推定する喜田貞吉説など諸説があった。今回発掘調査した明日香村豊浦と橿原市和田とにまたがる地が有力である。推定の主な根拠は，1)蘇我稲目の「小墾田家」・「向原家」に仏像を安置したといい，それが豊浦寺の前身であると考えられること，あるいは日本書紀の朱鳥元年に五寺の一として，「小墾田豊浦寺」をあげていることなどから，小墾田は豊浦寺の近くを指す地名があるいはそれを含むより広域を示す地名と考えられること，2)小字名に「古宮」という名称をとどめ，ここに建物の基壇跡かとみられる小土壇が現存し，古瓦の散布が認められること，3)「古宮」土壇の近くの水田下から，明治11年に金銅製四環壺が出土していること，4)付近の水田地帯は，東西・南北300m四方ほどの範囲が周囲より一段と高い平坦地となっており，古代の宮殿が立地するのにふさわしい地形を示していることなどがあげられる。今回は「古宮」土壇の周辺を発掘し，掘立柱建物・石組大溝・素掘りの溝・庭園などの遺構を検出した。この地域の旧地形にはかなりの起伏があって造営に先立って地ならしが行われている。



第6図　小治田宮推定地遺構配置図

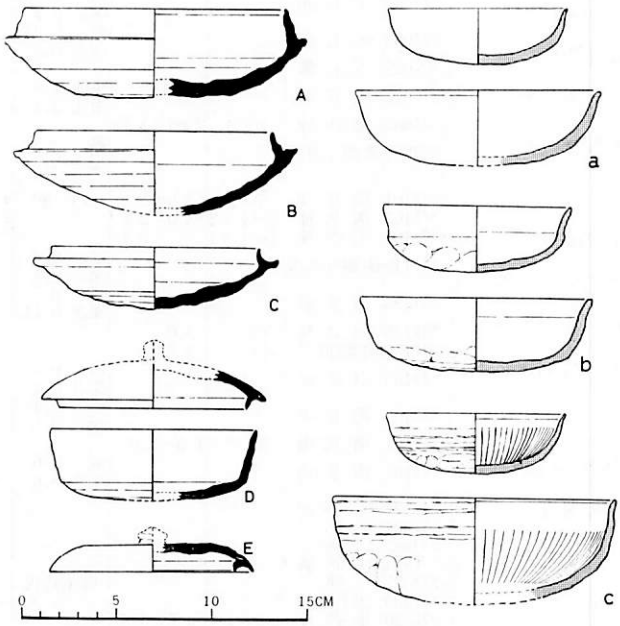
発掘区の各所で，掘立柱建物の柱穴と思われる遺構を検出している。規模を確認できたのはＳＢ085のみであった。ＳＢ085は６間×３間の東西棟で，「古宮」土壇のすぐ南側，かつて金銅製四環壺が出土したと伝える付近でみつかった。柱穴から出土した土器や，柱間寸法が奈良尺（9.5×6尺）よりも高麗尺（８×５尺）の方が完数が得られることなどからみて，後述するＳＤ050や庭園遺構同様７世紀前半から中頃の時期のものとしてよいだろう。

ＳＢ085の南方約30mで，東南より西北へ流れる大溝ＳＤ050を検出した。まっすぐに47m以上のびており，その走行は東西に対して北に20度ふれている。幅1.5～1.8m，深さ0.4～0.6m，両側には0.2～0.4m大の河原石を２～３段積みあげている。堆積層の状況からみて，かなりの流水があったと認められる。堆積層から土師器・須恵器が多量に出土している。

この大溝の北側には，小規模な庭園がある。池ＳＧ070から，玉石溝ＳＤ060へ，水が流れ出るようになっており，周囲は，石だたみＳＸ065となっている。池ＳＧ070は，楕円形の平

面をなし，こぶし大から人頭大の河原石を，深さ0.5mほどの摺鉢状に貼りつけている。縁には特に大きな石を配している。西半部は破壊されている。玉石溝ＳＤ060は蛇行して西南へ向い，大溝を切っている。先端は調査地域外にのびる。この溝は，側に河原石をたてにならべ，底に河原石を敷いている。ところがＳＤ050との交叉点以南では，底石はなく，側石も貧弱である。したがってＳＤ060は当初大溝より以北のみがつくられ，大溝に流れ込んでいたが，大溝廃絶後に南に延長した可能性もある。石だたみＳＸ065はこぶし大の河原石を用いている。小範囲しか現存していないが，周囲には，河原石が夥しく散乱している。本来は，広範囲であったと考えられる。素掘りの南北溝ＳＤ124も，ＳＤ050と同時期のものと考えられる。以上より新しい時期の主な遺構としては，ＳＸ051，ＳＸ066，ＳＤ090などがあげられる。ＳＸ051及びＳＸ066はともに１ｍほどの間隔で河原石を並べたものである。藤原京の南京極はちょうどこの周辺と推定されているので，これら遺構はそれと関連する可能性もあるが，時期的には検討すべき点を残している。ＳＤ090は，幅３ｍほどの素掘りの溝である。「古宮」土壇をなかに南北35m，東西40mの方形にめぐっている。出土遺物からみて中世のものと推定できる。また，「古宮」土壇の中央部には石積みがあった。その精査は今後に残したが，ＳＤ090とほぼ同時期のものと考えられる。したがって，これを以って古い建物跡とする根拠はなくなった。

遺物は，土器と少量の瓦・塼がある。土器は池や各溝から多量に出土し，これらの遺構の重複関係から飛鳥時代土器編年の手がかりを得た。須恵器は，杯蓋からみると５型式に分類でき，ＡからＥへの変化がたどれる（第７図）。これからみると大溝ＳＤ050はＤ，玉石小溝ＳＤ060・池ＳＧ070はＥの時期までそれぞれ存続することが判る。須恵器と共伴する土師器をみると，椀類は，粗雑なつくりのａ・ｂから胎土は良質でヘラミガキ・暗文のあるｃへと変化する。このほか，遺構をおおう暗褐色砂質土層出土の土器がある。土器は単純ではないが，それらのなかには，先述の土器と，藤原宮跡の土器との中間をつなぐ一群の土器がある。なお，縄文式晩期の土器や弥生式土器が断片ながら出土している。ほかに，ＳＤ060から出土した単弁蓮華文の塼（口絵）がある。これ



第７図　小治田宮推定地出土土器（左・須恵器，右・土師器）

第8図　豊浦寺跡石列

は百済軍守里廃寺出土例に類似する。瓦は，暗褐色砂質土層ないし床土から，単弁八葉蓮華文軒丸瓦など数点発見されたにすぎない。これらの瓦は豊浦寺・奥山久米寺出土のものと同笵の可能性がある。

以上の事実から，この地域は広範囲に遺構が存在することがはっきりし，7世紀前半から中頃にかけて宮殿跡であった可能性が大きいといえよう。しかも，大構と庭園遺構との重複関係からすくなくとも2回にわたる造営が認められる。

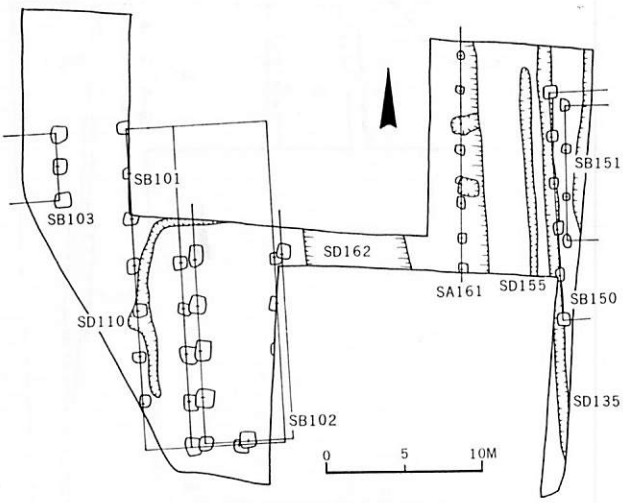
豊浦寺跡　この発掘は明日香村豊浦74-1番地の水田の宅地転用にともなう事前調査である。現在の広厳寺本堂の北方50m，甘樫岡に連なる丘陵の東裾部にあたる。「古宮」土壇は，ここから北150mほどのところにある。小治田宮・豊浦宮・豊浦寺の関連を知るうえで重要な地点である。発掘地の西北隅の西側丘陵裾部で南北方向に並ぶ石列を検出した。長さ30cmほどの石を一列にならべたもので，東側を面としていた。その方位は，現在の広厳寺本堂と本堂前庭で発見された建築遺構の方位とほぼ一致し，真北に対し西へ18度ほどふれている。この石列の南方10mで拳大の小石を敷きつめた石敷を検出した。北と西側は後世の穴などによって破壊されており，南と東側は発掘区域外にのびる。その年代や性格は明らかでない。石敷の北側を破壊する穴は，径8m以上ある。中には夥しい量の瓦礫とともに礎石が3個投げ込まれていた。瓦類は飛鳥時代から室町時代に属するものがある。土器も近世のものにまで及んでいるので，埋めた時期を近世とすることができる。

以上によって，この調査地域が寺の境内であったことは明らかである。瓦礫を捨てた穴の存在や付近の地形などから判断すると，この地域は境内の西北隅に近い位置にあたり，石列はその境界となる施設かもしれない。

雷丘東方遺跡　この発掘は明日香村雷18—1番地の水田の宅地転用にともなう事前調査である。雷丘の東裾にあたり，すぐ北方を「山田道」が通る。小範囲の発掘にもかかわらず，掘立柱建物5棟・掘立柱列1条・大溝1条のほか数条

	遺構		柱間数	柱間寸法 桁×梁	備考
小治宮跡推定地	SD050	玉石溝			幅 1.8m 深さ 0.5
	SD060	玉石溝			幅 0.25 深さ 0.2
	SX065	玉石敷			
	SG070	玉石池			東西 2.8 南北 2.4
	SB085	東西棟	6×3	2.85×1.78	
	SD090	素掘りの溝			幅 2.5 深さ 0.7
雷丘東方遺跡	SB101	南北棟	7×3	3.0×3.0	西廂
	SB102	南北棟	5以上×2	3.0×2.8	
	SB103	東西棟	1以上×2	2.1	
	SD110	素掘りの溝			幅 0.8 深さ 0.1
	SD135	南北溝			幅 0.7 深さ 0.15
	SB150	南北棟	5×	3.0	
	SB151	南北棟(？)	3×	3.0	
	SD155	南北溝			幅 0.5 深さ 0.2
	SD160	南北溝			幅 0.4 深さ 0.15
	SA161	南北柵	7以上	1.5〜2.0	
	SD162	南北溝			幅 8.0 深さ 0.6
藤原宮跡第2次	SG520	玉石池			
	SD521	溝			
	SD523	溝			
	SA524	玉石溝			
	SD527	溝			弥生時代
	SG529	玉石大池			
	SB530	東西棟	6×4	4.5×4.5	

第6表　主要遺構



第9図　雷丘東方遺跡遺構配置図

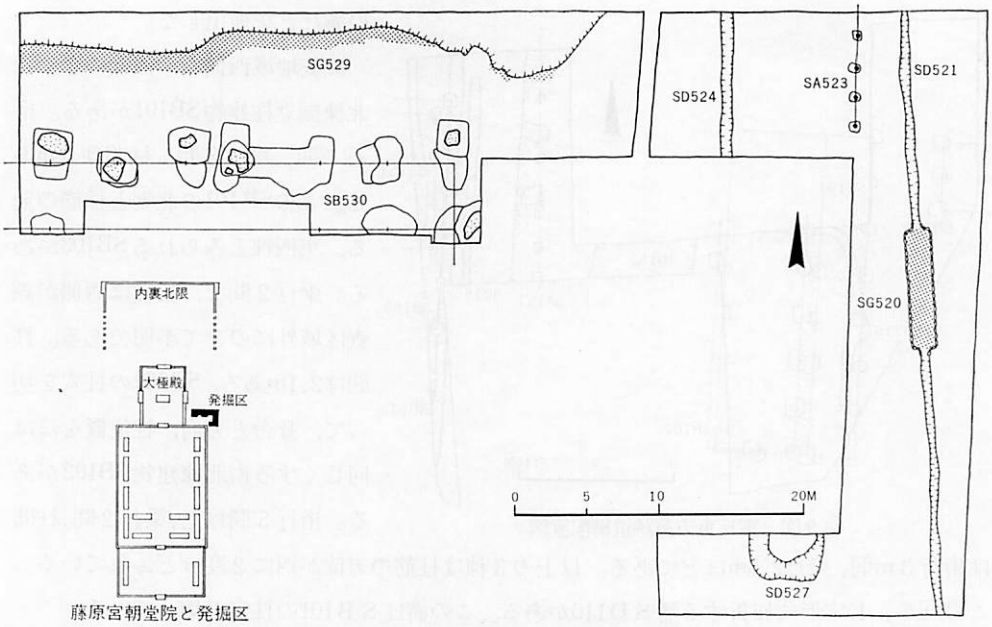
の溝などを検出した。

調査地域西側に，西廂つきの南北棟掘立柱建物SB101がある。桁行7間，梁行3間，柱間は3mある。このSB101の北妻と柱筋の通る，東西棟とみられるSB103がある。梁行2間で，桁行は西側が調査区域外にのびて不明である。柱間は2.1mある。SB101の柱穴を切って，身舎と方向，柱位置をほぼ同じくする南北棟建物SB102がある。桁行5間以上，梁行2間，柱間は桁行3m弱，梁行2.8mほどである。以上の3棟は柱筋の方位が西に2度ほどふれている。このほか，L字形に屈折する溝SD110がある。この溝はSB101の柱穴を切っている。

これらの東側に南北の素掘りの溝SD162がある。幅8m，深さ0.6mの大規模なものである。南北方向の掘立柱列SA161は，この溝の底面で検出した。柱穴は小さく，柱間寸法も1.5～2mと不揃いである。溝SD162の東側で検出した掘立柱建物SB150は桁行5間(柱間3m)の南北棟である。東側は発掘区域外で，梁行数は明らかでない。掘立柱建物SB151はSB150とほぼ同位置にあり，南北に3間（柱間3m弱）を検出した。桁行3間，梁行2間の南北棟かもしれない。このほか，南北溝SD135，155，160を検出した。SD135はSB150と重複し，後者より古い。これらの遺構の方位はSB151とSA161が真北に近いほかは，西地区のものと同方位である。

遺物には，SD110から多量に出土した土器がある。これらの土器は藤原宮跡出土の土器より，やや古い要素をもつものである。他の遺構からも土器が出土しているが，SD135出土の土器をのぞいてSD110出土土器に近いものが多い。この調査地域附近は，飛鳥浄御原宮跡推定地の西辺にあたる所で，それとの関連で注目されよう。SD135の土器は，奈良時代後半のものである。またSB150の柱穴から軒平瓦(平城宮6691型式)が出土し，周辺からも鬼瓦・軒平瓦(平城宮6721型式）が発見されている。

藤原宮大極殿東方（第2次調査）　調査は大極殿跡である大宮土壇の東南130mの地域で行なった。この地域は，日本古文化研究所の調査で，朝堂院回廊とその北側で礎石・根石を確認している地域の北方にあたる。今回の調査は，奈良県教育委員会の調査で東北隅を確認した内裏外部回廊の南延長部の追求と，それが日本古文化研究所の調査で検出した遺構とどのような関係にあるかを明らかにすることを目的としたのである。検出した遺構は，礎石建物1，柵1，池2，溝4などである。朝堂院回廊の北30mの所で検出した礎石建物SB530は，



第10図　藤原宮大極殿東方遺構配置図

大きな礎石を使用した東西棟である。礎石は，6ヶ所で検出したが，ともに後世に移動し，原位置を保つものはなかった。調査地域が限定されていたため建物の全規模は確認できず，桁行6間分，梁行1間分（柱間ともに約4.5m）を検出したにとどまった。これに日本古文化研究所の調査の結果をあわせると，ＳＢ530は，大極殿回廊までの距離からみて桁行7間か9間，梁行4間の建物に復原できる。ＳＢ530の北約6mで石敷の池ＳＧ529を検出した。

調査地域東側では，玉石池ＳＧ520と南北に延びる溝ＳＤ521を検出した。ＳＧ520は，南北長さ8m，幅1.8m，深さ0.15mあり，床面には拳大の扁平な河原石を敷きつめ，側壁には同様の石を立て周囲をめぐらせている。ＳＧ520の南と北にＳＤ521が取りつき，南から北に流れる水を溜める池として設けられたものであろう。ＳＤ521の西約3mの所に掘立柱列ＳＡ523を検出した。調査地区内で3間分（柱間2.1m）確認し，いずれも柱根が遺存していた。この他，弥生時代終末期から古墳時代初期にかけての溝ＳＤ527を検出している。

調査地全域で多量の土器・瓦が出土した。特に礎石建物周辺では瓦の出土が顕著であり，軒瓦では6275・6643型式のものが多い。

内裏の規模および朝堂院との関係確認を目的とした調査であったが，発掘地区内では所期の目的を達することができなかった。しかし，内裏の外郭と予想される地域で，かなりの規模をもつ建物と庭園関係と思われる遺構の存在を確認することができ今後の調査に大きな期待をもたせるものとなった。

（木下正史・稲田孝司・石丸　洋）

奈良山第53号窯の調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮造営に用いた瓦は，ほとんどが奈良山丘陵で焼かれたといわれている。宮の北方に連って青垣をつくる奈良山は，標高45～140mのゆるやかな丘陵地で，大部分は山林と原野である。

窯跡はこの丘陵のなかにあって，奈良市・京都府相楽郡木津町・同精華町にまたがって分布している。現在までに50基以上発見されていて，なかでも奈良市中山町と精華町乾谷には，あわせて半数ちかい窯跡が存在し，分布の中心をなしている。これら窯跡は，主として平野に面した丘陵裾に立地する傾向にあり，宅地・田畑などの開発ではやく消滅したものも多数あると考えられる。

第1図　平城山第53号窯配置図

これまでに発掘などによって窯体構造の知られるものには，乾谷の登り窯[註1]と，奈良市歌姫町の平窯[註2]がある。しかし，宮内出土と同型式の瓦を発見したのは，わずかに中山町付近の散布地があるのみで，実態については不明な点が多い。

昭和39年，この奈良山丘陵において団地を造成する計画が，日本住宅公団によって立てられた。造成面積は610haで，丘陵の半分以上の広さを占め，完成時には人口75,000人の都市となる。

団地内には多数の遺跡が存在することが予想されたため，工事に先だって，日本住宅公団の委託研究として分布調査をおこなった。その結果，窯跡の他にも古墳・寺跡などが16ヶ所以上発見された。このうち，団地内第8号地点（53号窯）は瓦の散布が知られるのみで，遺跡の性格が不明であったため，事前に調査して確めることになった。調査にあたり，奈良県教育委員会内に平城団地内第8号地点調査委員会を結成し，昭和45年7月20日から同年8月31日まで，発掘調査を実施した。発掘の結果，3基の窯跡と多数の平城宮と同型式の瓦を発見した（3基の窯跡は発見順に53—Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ号窯と呼ぶ。）。以下調査の概要を報告する。

53号窯は奈良山のほぼ中央で，東西に走る支谷の出口近くにある。この谷は，東で南北に延びる大支谷に連っており，南方へ抜けると窯跡から平城宮へは約2kmの距離になる。窯跡は，水田から尾根の頂上まで比高約20mの丘陵南斜面中腹に立地し，標高77～84mの間に

ある。行政区画のうえでは奈良市山陵町1585～1に属している。

発掘に先だってボーリング調査をおこない，その結果をもとにトレンチを設定した。発見した窯跡のうち，Ⅰ号窯は最も新しく，Ⅰ号窯の灰原下から発見したⅡ号窯がこれに次ぎ，Ⅱ号窯によって破壊されていたⅢ号窯が最も古い。各窯の詳細は次のようである。

Ⅰ号窯　3基の窯跡のうち最も高い所に位置し，煙出し部先端で標高84mである。砂礫の地山をベースにした全長7.5mの登り窯である。焼成部の長さは奥壁から4.5m，燃焼部の長さは約2mが残っている。天井はすべて落下し，傾斜変換部の前後1mは地すべりのため完全に崩壊していた。

燃焼部は側壁をまったく失ない，わずかに木炭と灰の堆積する舟底が残るだけである。焼け方はにぶく，ほとんどわからない。焚口と推定できる部分の前方約5mはほぼ平坦である。これは窯体を掘った際の排土を利用したもので，いわゆる前庭部にあたり，窯焚きの作業場である。舟底には灰原へ続く排水溝が設けてあり，溝の中には瓦を敷いている。

焼成部は床幅2mで，長さ4.5mが残存している。床面は当初，地山を階段状に削り出してつくり，のちに2回にわたって瓦と粘土を用いて補修しており，合計3層が区別できる。最終の床面には，比高1.3mの間に10段の階段が残っている。階段は主として丸瓦を横に並べて作ってある。床面傾斜は10度強で，延長すると燃焼部との間で段落ができる。側壁は，左側では下部約25cmの間は地山を利用し，上部はレンガブロックを積む。レンガ積みの表面を粘土で上塗りした部分もある。レンガはスサ入り粘土を固めたもので，長さ30cm，幅25cm，厚さ7cmほどのものが多い。発掘中に観察したところでは，このレンガのほとんどは一面のみから火を受けており，天日で乾燥させたままで用いたと考えられる。レンガを積むための掘り方が側壁外方60cmから掘られていた。右側壁は地山壁が10cmの高さに残るのみで，レンガ積みは不明である。

奥壁もレンガを使って築き，左端で60cm，右端では10cmの高さに残っていた。中央で，床面から平瓦を立てて，幅25cm，高さ30cmの煙出し穴をあけている。煙道は上方へ約90cm残っていた。

灰原は焚口から下方へ扇形に広がっていて，裾部は現水田下まで達している。灰原の左右の広がりは最も大きい部分で約12mある。灰層は厚い部分で80cmほどで，木炭，灰の少ないのが注意された。

なお，灰原からは多数の瓦が出土した。瓦は平城宮軒丸瓦6308・6133，軒平瓦6682型式（第2図）のものと二種の鬼瓦（第5図）のほか，多量の丸・平瓦がある。

第2図　窯跡出土軒丸・平瓦

Ⅱ号窯　Ⅰ号窯の東南4m，一段低いⅠ号窯灰層下から検出した。全長約6m，ロストルの無い形式の平窯で，ひとまわり大きな掘り方を持つ。窯体は良好な保存状態で，焼成部と燃焼部では天井の一部が残存し築窯方法を知ることができた。

焚口の床幅は約1mで，焼成室へ水平に延びて1.6mに広がる。焚口前方にはハの字にひらき，狭い前庭部へ続き，前庭部の前は急激に下って灰原となる。燃焼部床面はオレンジ色を呈し，堅く焼けしまっていた。小礫と木炭の間層によって合計3層に区別でき，各床の厚さは約10cmである。側壁は掘り方の内側に置き土をして整形し，スサ入り粘土を上塗りして仕上げる。天井も同様に粘土を貼りつけてある。床から天井までの高さは約1mである。燃焼室と焼成室とは30cm弱の段落で区分されており，両者の間には直径50cmほどの分焔柱が立って天井まで達している。分焔柱は軒平瓦を数枚合わせて心とし，スサ入り粘土で巻いてつくる。

第3図　Ⅱ号窯分焔柱と天井

焼成室は，床面は奥壁まで延長約2.5m，幅1.8mである。ロストル等の施設はない。傾斜は少なく，2.5mの間で約10cm高くなるだけである。側壁は左側では約90cmの高さに残っており，分焔柱の近くで天井と続いている。右側壁は10cmの高さに残るのみであった。これは，瓦を取り出す際に，右側壁がわを壊したためと想像される。側壁と天井は，ノシ瓦または平瓦の間にスサ入り粘土をはさんで積み上げ，さらに粘土を貼って内壁とする。掘り方は青灰色粘土の地山を切っており，側壁との間に木炭と瓦を含んだ泥土がつまっている。天井部は瓦をもち送りに積み，瓦と瓦の間はスサ入り粘土で補強している。床面からの高さは1.2mである。

奥壁は左端で40cm，右端で10cm程の高さに残っている。床面から10cm上で3本の煙出しが出て，上方で1本にまとまっている。煙出しは，奥壁から出てすぐに約40度の角度で1.5mのび，さらに垂直にちかく1mたちあがって地表に出る。地表では丸瓦を立てて出口を囲い，崩れるのを防いでいる。

Ⅲ号窯　Ⅱ号窯の下に重なっている登り窯で，窯体後半部は地山くりぬきである。燃焼部と焼成部の一部は，Ⅱ号窯の構築により破壊されていた。現存長約4.5mで，煙り出しまでの保存状態は良好である。

焚口と燃焼部はまったく不明であるが，Ⅱ号窯燃焼室の床面下で地山との間に木炭層を認めたので，Ⅲ号窯の燃焼部もⅡ号窯とほぼ同位置と推定した。従って，前庭部の状況はⅡ号窯と似たものとなる。右前庭部には灰原へ続く排水溝があった。溝は直接地山に掘ってあり，

第4図　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ号窯実測図

溝底には平瓦片を敷いてある。この溝は付近の層序からみて，Ⅲ号窯に伴うものと判断した。溝の右では地山が急に上がり崖となる。右前庭部は狭く，2m足らずである。左前庭部はなだらかな傾斜で灰原へ続く。

焼成部は奥壁から3.5mの間が残っている。現存最大幅2m，天井までの高さ1.2mである。床面は階段状に作るが，残存部の前半と後半では整え方が異る。すなわち，前半0.5mの間は丸瓦を横に並べ，後半ではスサの入らない粘土を置いて階段とする。床面傾斜は約22度ある。後半では階段が7段残り，天井，側壁ともに原形をとどめていた。青灰色粘土地山をくりぬいたままで，貼りつけ等の補修はない。なお，Ⅲ号窯の床面下ではもう一層の床面を認めた。その床は幅1.2mでⅢ号窯のものより狭く，掘り凹めた地山をそのまま利用して階段状に作られていた。床の延長は，Ⅱ号窯をはじめとする上層遺構を破壊しないため，追求しなかった。

奥壁は約50cmの高さである。煙出しは直径30cmで，天井中央の奥壁際から斜め後方へ約50cm延びる。地山くりぬきである。床面から先端までの高さは現状で約1mを測る。

灰原はⅡ・Ⅲ号窯の区別はできなかった。検出した部分での最大幅6m，炭化物を含んで黒色を呈する部分の厚さ約1mある。

まとめ　3基の窯跡からは多数の瓦を発見した。各窯ごとの軒瓦の出土点数は第一表のごとくである。このうち，窯体としたものは，窯体内，あるいは焚口，前庭部付近で発見したもので，いずれの窯跡に属するか確実に判定できるものである。灰原へ含めたものの内には，表土や灰層の上面で発見したものもあるが，出土した地点と層序から，いずれの窯跡に伴うか推定した。

3基の窯は，いずれも同笵の軒瓦を焼いていて，窯ごとの区別はできない。特にⅠ・Ⅱ号窯では，それぞれの窯体内から同笵の鬼瓦が出土している。この鬼瓦は，平城宮内・第37次調査出土のものと同型式である。軒丸瓦のうち6133—K型式は，宮内では完形品が出土しておらず，型式を確定できなかったもので，本窯出土によって明らかになった。

軒平瓦は6682型式の一種類である。発見したものはすべて曲線顎で，段顎はない。全長を計測できる中には34cm位の短いものがある。本窯ではこれら4種の軒丸瓦と，一種の軒平瓦が同時に焼かれ，セット関係にある。

今までのところ，平城宮内ではこれらの軒瓦がまとまって出土した地域はない。窯跡が単独で存在することも考えあわせると本窯はさしかえのための瓦を焼いた可能性が強いといえる。

第5図　窯跡出土鬼瓦

3基の窯がⅢ→Ⅱ→Ⅰ号窯の順に築かれたことは先にのべた。それぞれが構造を異にしながらも同笵の瓦を焼いているところから，各窯は短期間のうちに連続して営まれたと考えられる。

Ⅰ号窯にみた日乾レンガを使用する例は，古く精華町乾谷で発見された登り窯がある。乾谷は最初にふれたごとく，平城宮瓦窯の分布する中心地にあたる。この瓦窯の焼成部は，側壁をレンガで床面から天井まで積み上げ，床面には丸瓦を横に並べた痕跡がある。軒瓦は出土していないが53—Ⅰ号窯と構造が類似している。

日乾レンガ，または石材などのブロックを積んだ瓦窯のうち，宮造営に関係あるものには藤原宮所用日高山瓦窯[註3]と，藤原宮瓦窯ではないかといわれる南浦三堂山瓦窯[註4]がある。日高山瓦窯は平窯で，構造は53—Ⅱ号窯に似ている。焼成部はすべて「磚」を小口積みに積み上げたものである。南浦三堂山瓦窯のうち1基は，側壁基底部を切石で積み，その上に日乾レンガを積み上げていた。日乾レンガ等のブロックを使用して瓦窯を築く方法は，今述べたわずかな例でも登り窯と平窯の両方にあることがわかる。類例の少ない構造なので，将来瓦窯間の関係を追求する手がかりとなろう。

特異な構造の53—Ⅱ号窯は，平面形が日高山瓦窯に類似しており，ロストルの無い点や，3本の煙出しを持つ構造からみても，両者は非常に近い。すなわち，日高山瓦窯の発展したものがⅡ号窯と推測できるのである。Ⅱ号窯では分焔柱を設けていたが，これは日高山瓦窯に比べて燃焼室が高いため，焼成室との間で炎をしぼる必要があったと思われる。煙出しが低い位置から出るのも，これに関係するのであろう。

Ⅱ号窯ののちに築かれたⅠ号窯が，平窯の形をとらず，伝統的な登り窯の形式を採用しているのは，瓦窯における登り窯から平窯への移行が一斉におこなわれたのではなく，その間にかなりの試行錯誤の過程があったことを示している。

なお，平城団地内の遺跡保全については，緑地として残される一部を除けば，必ずしも充分な処置がとられているとはいえない。団地造成地区外にある窯跡群が，この造成によって波及的に犠牲になる公算は大である。早急に保護の手を加える必要があるといえよう。

梅原末治・赤松俊秀「山田荘村乾谷の瓦窯阯」（京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第14冊 1933）

2　藤沢一夫「屋瓦の変遷」（世界考古学大系4　1962）

3　網干善教「橿原市飛鳥町日高山瓦窯跡」（奈良県文化財調査報告書 第5集 1962）

4　泉森皎「南浦三堂山瓦窯跡遺跡」（調査だより No. 1 奈良県教育委員会 1971）

（八賀　晋・西村　康）

第1表　型式別瓦出土状況

海竜王寺の発掘（2）

平城宮跡発掘調査部

1970年7月，奈良市法華寺町の海竜王寺旧境内にある，国指定建造物の防災工事が行なわれた。消火栓導水管埋設にともない，調査部は奈良県教育委員会に協力して，立会い調査をおこなった。

海竜王寺では，奈良県文化財保存事務所による重要文化財西金堂解体修理工事の際，中金堂，西金堂，北・西面回廊の旧基壇が発見され，また，地表上に東金堂基壇北面凝灰岩地覆石，中金堂正面階段凝灰岩地覆石が露出している。今回の掘削工事は伽藍中心部におよび，検出された主な遺構は，中門，南・東回廊，中金堂背面敷石，東・西僧房などである。

中門　表土直下から，中門の北面階段凝灰岩最下段々石および，北面基壇の凝灰岩地覆石を検出した。階段の東側では，すでに地覆石は失なわれていた。

東・南面回廊　重要文化財経蔵北方のトレンチで，回廊東南角の入隅部基壇の凝灰岩地覆石を検出した。南面回廊の地覆石の残存状態は悪かったが，東回廊のものは（77.0cm×47.0cm×9.0cm）残りが良く上面には羽目石の仕口があり，また，入隅から東へぬける水抜溝の凝

第1図　海竜王寺旧境内地形実測図・遺構配置図

灰岩側石および底石が検出された。

先年発見した，北・西面の回廊を合せ考えると，回廊基壇の全長は，内法東西長47.65m，南北18.10mとなる。東西長さと南北長さの比は2.6：1となり，非常に横に細長いものとなる。

第2図　海竜王寺出土土器

金堂背面遺構　現本堂は，中金堂跡のうえに建てられており，本堂の背面をとおる幅40cmのトレンチで玉石敷を検出した。玉石敷は東西に広く24.5cmの範囲に広がっている。松本重信住職によれば，南北幅はもっと広いといわれ，中金堂の雨落溝ではなく，中金堂背面の敷石と考えられる。

また，想定伽藍中軸線から東へ14.5mの位置で玉石敷がきれ，凝灰岩切石（地覆石か？）があり，さらに東に基壇土がわずかに残存しているところから，何らかの建物があったものとみられる。これは古図にみえる東僧房に相当する建物であろうか。

その他の遺構　西金堂北側のトレンチで凝灰岩礎石を1個検出した。これを北面回廊の礎石とするのは，回廊基壇内側地覆石から礎石までの心々距離が6.9mと大きくなりすぎる。あるいは，先に検出した東側建物（東僧房）と対称の位置にある建物（西僧房か？）の礎石であろうか。

西金堂東側のトレンチで3カ所，本堂北側のトレンチで2カ所に掘立柱の掘方を確認した。いずれも，地山から掘り込まれているが，寺との前後関係はわからない。

調査で出土した遺物は，少量であるが，瓦と土器がある。瓦類のうち，奈良時代のものは，平城宮軒丸瓦6282型式，軒平瓦6671・6721型式と同型式で，同笵である。その他は，室町時代から江戸時代にかけてのものが数点あるだけである。当寺旧境内からは，いままでに飛鳥時代の軒丸瓦をはじめ重弧文軒平瓦などが発見されている。奈良時代のものは6282・6721の両型式が多量に発見されている。土器は8世紀後半の杯が2点ある。1は口径17.2cm，高さ3.5cm，外傾してひらく口縁部を有し，底は平底である。口縁端部は内側に1条の沈線がめぐる。底部外面はていねいにヘラケズリし，さらに横ナデを行なっている。2は高台のつく杯である。口径20.8cm，高さ3.1cmである。外傾してひらく口縁部を有し，口縁部と底部の境は明瞭な稜をなす。底部のやや内側に輪状の高台がつく。底部外面はヘラケズリをしている。胎土は1・2とも灰白色を呈し，1は砂粒を含み，2は砂粒をほとんど含まない。

第3図　海竜王寺中門基壇の地覆石と階段々石

（森　郁夫・村上訓一）

その他の調査

歴史研究室・平城宮跡発掘調査部

久米廃寺（岡山県久米郡久米町）　岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設工事に伴う調査。1971年1月，沢村が参加した。従来知られていた塔跡の東に軒を接する仏堂跡を検出した。塔の西の仏堂は東向堂宇と判定できた。岡山県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査中間報告　久米寺廃寺』(1970．11）参照。

伯耆国分寺（鳥取県倉吉市国分寺字薬師）　県道つけかえ工事に伴って発見された塔跡の前年度調査にひきつづいて，伽藍配置および寺地を明らかにするために倉吉市教育委員会がおこなった発掘調査。1970年7・8月，坪井・沢村・佐藤が参加。金堂，講堂基壇および回廊の一部を確認し，寺地の東西北限がほぼ明らかになった。主要伽藍は寺地のほぼ西寄り⅓に位置することがわかった。倉吉市教育委員会『伯耆国分寺跡発掘調査報告』Ⅰ（1970.3）参照。

元興寺極楽坊（奈良市中院町）　元興寺極楽坊の，境内東辺の防火壁設置工事にともなう事前調査。1970年8月，沢村・森が参加した。奈良時代の遺構として，現在の東門の中心から約15m東方に南北方向に走る築地と，これにともなう切石組みの暗渠を検出した。これは伽藍をめぐる築地の一部と考えられ，条坊研究のための好資料を提供した。また，事務所の西北に計画された釈迦院建設予定地の発掘調査を合わせて行なった。この地は，東室北階大坊や小子坊跡の推定地であったが，後世の攪乱が著しいために，明瞭でなかった。

隠岐国分尼寺跡（島根県隠岐郡西郷町大字有木）　1969年度につづいて，史跡推定にともなう範囲確認のため行った第2次調査。1970年8・9月，町田が現地指導を行い，門と柵を検出し，隠岐国における国分尼寺の様相がほぼ判明した。隠岐島後教育委員会『隠岐国分尼寺調査報告』（1971．3）参照。

薬師寺（奈良市六条東町）　近畿大学杉山信三氏による薬師寺伽藍の学術調査。第3年度として，食堂・僧房・経楼跡の調査。1970年7～10月，阿部・小笠原・西村・天田・西・佃・真木が指導援助した。調査の結果，食堂とその左右に大規模な三面僧房，回廊と僧房の間に経蔵の一部などを検出した。僧房は，973年に焼失廃絶したことが知られているもので，今回の発掘調査で部屋割りや内部施設，床面などの詳細が明らかとなった。床面の僧房焼失時の焼土中から，土師器・須恵器・緑釉陶器などが一括して出土した。これらのものは10世紀末の絶対年代を知りうる点で，貴重な資料である。毎日新聞社『薬師寺』(1971）参照。

第1図　唐三彩宝相華文陶枕

出雲国庁跡（島根県松江市大草町）　松江市教育委員会による出雲国庁所在確認のための第3次調査。1970年10～12月，町田が担当，坪井・鬼頭・石松・稲田・甲斐が参加した。調査の結果，7世紀後半から中世にまで存続する出雲国庁であることが確定した。松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』（1970．3）参照。

能登国分寺（石川県七尾市国分町）　国分寺の「だいもん」跡を含む水田が工場敷地として埋立てられたのを契機とし寺域確認を主目的とした調査。1970年10月，七尾市教育委員会が実施し，河原・村上が参加した。礎石建物2棟および寺地の東を限るとおもわれる築地を発見した。七尾市教育委員会『史跡能登国分寺跡第一次調査概報』（1971.3）参照。

陶枕の調査（京都国立博物館）　大安寺出土の唐三彩陶枕の研究に関連し，京都国立博物館で開催された「唐宋の陶枕」展に出品中の遺物9点の写真・実測調査。1970年10・11月八賀が担当し，佃・高島・西村・西が参加した。とくに紋胎釉の陶枕では，表面のみ紋胎の模様をはりつけたものがあり，本体全部が紋胎のものとは技術的に差があることを確認した。

大宰府（福岡県筑紫郡二日市町）　福岡県教育委員会が行っている大宰府第6次（政庁西南地区）の調査。1970年10月，沢村が現地で指導助言を行った。また，大宰府条坊及び周辺条里の現地調査。狩野・宮沢・横田・鬼頭が参加した。福岡県教育委員会『大宰府史跡』（1971．3）参照。

伊場遺跡（静岡県静岡市伊場）　国鉄検車場建設にともなう事前調査。1970年12月，狩野が参加し，木簡解説・整理指導を行った。浜松市遺跡調査会『伊場遺跡第3次発掘調査概報』（1971．2）参照。

横山古墳（兵庫県姫路市横山）　業者の土砂採取にともなって，姫路市教育委員会が行った緊急事前調査。古墳時代初期の前方後円墳，石棺・壺棺・土壙墓などの埋葬遺構の群集地。1971年2月，横山・高島が現地で，指導助言を行った。

大宰府条坊（福岡県筑紫郡大宰府町五条）　福岡県教育委員会が福岡南バイパス建設にともなって実施した調査。1971年2・3月，石松が参加した。発掘地は大宰府条坊の七坊八条に推定されている所である。南北の溝・井戸・住居跡等を確認したが，いずれも中世のものと考えられる。福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集（1970）参照。

台渡廃寺（茨城県水戸市渡里町）　水戸市教育委員会主催で行う。むこう3年間にわたる調査の第1回調査。1971年3月，田辺が参加した。この廃寺は，戦前高井悌三郎氏によって1部調査されている。今回の調査の目的は，塔跡周辺の寺域確認であった。調査の結果，塔

第2図　西隆寺東大門跡（北から）

1・2 緑釉陶器　3～6 灰釉陶器　7～10 土師器
第3図　薬師寺僧房出土土器　11・12 黒色土器A　13・14 須恵器

跡南方と北方に東西溝，東方に南北溝を検出し，塔跡と南北溝の間にほぼ正方形の基壇跡を検出した。また，北方東西溝に接して工房跡があり，仏像型など出土している。

美濃国分寺跡（岐阜県大垣市青野町）　道路建設にともなう大垣市教育委員会による事前調査。1968年3月，八賀・細見・伊東・宮本・安達・田辺・佃・田中・西村が参加した。本年度は金堂推定地を調査し本寺が法起寺式の伽藍配置であることを確認した。大垣市教育委員会『昭和46年史跡美濃国分寺発掘調査報告』Ⅲ（1971．3）参照。

中の浜遺跡（山口県豊浦郡豊浦町川棚）　"西南日本に於ける埋葬遺跡の綜合研究"（代表金関丈夫氏）に交付された文部省科学研究費による調査。1970年3月，木下が参加。砂丘上に立地する弥生時代埋葬遺跡。7次にわたる従来の調査で東西2群の墓群が確認されている。今次は東群の周縁部を発掘。前期前半の土壙墓1，前期末～中期初の箱式石棺墓6（内小児棺3），小児壺棺墓1，中世の土壙墓1を検出。今次で東群をほぼ全面発掘したことになる。

西隆寺跡（奈良市西大寺町）　株式会社ダイヤモンドファミリー西大寺ショッピングセンターの建設にともなう奈良県教育委員会の緊急事前調査。1971年3月，狩野・牛川・村上・藤原・小笠原・森・西・黒崎が参加した。調査の結果，西隆寺東大門跡，それにとりつく東面大垣・寺内の瓦積基壇の築地・掘立柱建物・井戸などの遺構を検出した。遺物は木簡（造西隆寺司関係）・土器・瓦・木器などが多量に出土した。石野博信・村上訒一「西隆寺跡の調査」青陵No. 18，橿原考古学研究所（1971．7）参照。

鳴神遺跡（和歌山県和歌山市鳴神）　和歌山県教育委員会が実施した古墳時代集落跡の緊急事前調査。溝・池などから多量木製品が出土した。1970年7月，町田・西村・黒崎・沢田が木製品の緊急処理指導を行った。和歌山県教育委員会『鳴神遺跡』（1971．3）参照。

寿命王塚古墳出土土器　京都国立博物館に出品中の福岡県嘉穂郡桂川町・寿命王塚古墳出土土器の実測調査を1971年1月，石松・高島・西が行なった。実測にあたっては，京都国立博物館・鈴木基親氏，桂川町教育委員会のひとかたならぬ御協力を得た。

寿命王塚古墳の副葬品は，これまでにいくども紹介されているが，土器は一括して紹介されたことがなく不明な点が多かった。ここに紹介する一括の土器は，寿命王塚古墳出土土器のすべてである。これらの土器は，装飾古墳として著名なこの古墳の編年的位置を知るうえに，また，九州地方における須恵器の編年研究の資料としても貴重である。土器は蓋杯・杯・高杯・直口壺・提瓶・台付壺などの須恵器があり，大多数は暗灰色を呈する。なかにいわゆる「赤焼き」とよばれる赤褐色のものがある。「赤焼き」の土器は後述のように興味ある事実があるので別述する。

蓋杯（5～8）　口径11.5～12.4cm，杯はややひらたい底部に内傾する口縁部をもつ器形である。蓋は天井部と口縁部の境が屈曲し，外面に浅い沈線をもっている。蓋・杯の各口縁端部は内傾する面をもつ。この種の口縁端部をもつものとしてはもっとも新しい。底部および天井部外面ともやや粗いヘラケズリで調整している。

杯(14・15)　口径8～8.4cm，まるみのある底部に，内傾するがそりのある口縁部をもつ器形である。口縁端部はまるくおさめている。先述の蓋杯（4～7）より新しい型式とみられる。

高杯（10）　口径10.2cm，高さ13.1cm，長脚一段の透しをもつ，杯部下外面に櫛による刺突文がめぐり，脚には粗いカキ目が認められる。

直口壺（9）　口径10.6cm，復原高14cm，玉ねぎ形の体部に，外反する広い口縁がつく器形である。肩部にカキ目が認められ，体部下半はヘラケズリされている。

提瓶（11）　口径3.6cm，高さ11.4cm，まるい体部に外反する短い口縁がつき肩部には対称的に環状の把手がつく器形である。

台付壺（12・13）　裾のひらく脚台にまるい体部の壺部分がつく器形である。壺部分が破損して全貌を知りがたい。壺部現存部上半に横カキ目，下半に叩き目がある。脚台には長方形と三角形のすかしが三段と二条の沈線が4段，櫛描きのこまかい波状文が脚台をめぐっている。なお，脚台の高さは約27cmある。

以上の一般的な須恵器のほかに，赤褐色硬質の土器（1～4）がある。これらは先述の須恵器と同様ロクロ成形によっており，器形も同様である。胎土は精良で，須恵器にくらべてほとんど砂を含んでいない。また直口壺（4）の底部はナデで仕上げているが，杯の（1～3）底部外面は，中央部を一方向にケズリ，その周辺を左まわりに5～6回に分けてケズる。この底部ケズリは一般の須恵器の杯類の底部ケズリと手法を異にしており，単に，須恵器の焼き損じとはいいきれない。すすめていうなら，この「赤焼き」の一群の存在は，この種の土器の比較的多く分布する九州において，一般の須恵器工人とは異った系統の工人集団の存在がうかがえる興味ある事実である。今後の研究に期待したい。（高島忠平・西　弘海）

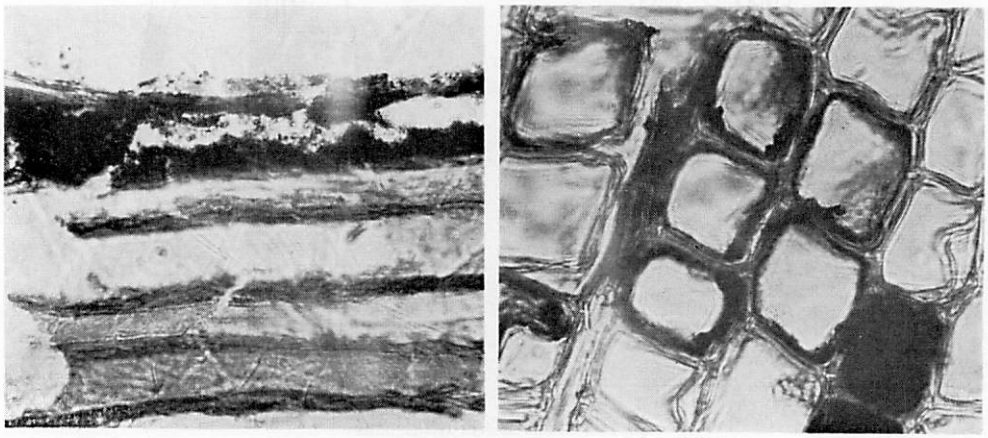
第4図　寿命王塚古墳出土土器

遺跡・遺物の保存

平城宮跡発掘調査部

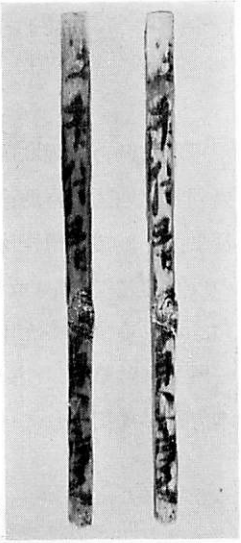
文化財に関する研究活動のうちで，重要な部門の１つとしてとりあげられるようになってきたものに，自然科学的方法による文化財保存の研究がある。この分野に関する限り，日本はヨーロッパ諸国にくらべるとかなり立ち遅れている。しかも，考古資料の保存に言及されてくるともう一歩遅れているのがわが国の現状である。そのため，平城宮跡の発掘調査を担当している当研究所では，東京国立文化財研究所の指導を得て，現場に即した遺跡・遺物の保存法開発の研究を進めている。その成果として，木簡の保存法を実用化させたことがあげられる。また平城宮跡出土の風化した礎石や，その他各種遺物の保存処理を，さらに外部の発掘調査に伴なう遺跡・遺物の保存処理を実施している。

木簡の真空凍結乾燥　長年,土中に埋没していた木材は過飽和に水分を含蓄しており，きわめてもろい状態になっている。そのため，自然乾燥させるとたちまち色が黒ずみ，ひび割れが発生し，激しい収縮を起してしまう。このような木材を永久保存するための処理方法として真空凍結乾燥法の他に，水溶性のワックスを充塡させて強化する方法，ショウノウを利用して乾燥させる方法，カリウムミョウバンを充塡させて強化する方法などがヨーロッパで紹介されている。なかでも木簡の保存処理に最も効果的な方法として真空凍結乾燥法が取り上げられてきた。しかし，ひび割れが生ずるなどの欠点があったので，当研究所では凍結乾燥しやすい有機溶媒“ターシャリブタノール<$(CH_3)_3COH$>”と木材中の水分とを置換してから乾燥させる方法に改良した。こうすると収縮やひび割れなどを防ぐばかりでなく，乾燥時間をも大幅に短縮することができる。しかし，水浸出土材の場合は新材にくらべて多孔質な状態にあるため,乾燥後は脆弱なものになってしまう。そこでワックスを溶かした有機溶媒を木材に含浸して凍結乾燥するとワックスが木材の内部に残留して強化されることになる。



第１図　木簡の墨書部分の断面(X360)　左・繊維方向　右・木口面

さらに木簡を処理する途上で墨書部分が消しにくいことも第1図の写真から推察することができる。つまり,出土する木簡の多くは仮導管の内壁に付着した墨だけが残存しており，木材の表面に付着していたと思われる墨はすでに剝落してしまっている。第2図は真空凍結乾燥による木簡の保存処理前後の比較写真である。処理後は木材の乾燥によって木の表面が明るくなり,文字がより鮮明になっていることがわかる。なお，有機溶媒にワックスを溶融させる方法はデンマーク国立博物館のクリステンセン氏(Dr. Christensen)のアドバイスによるものである。



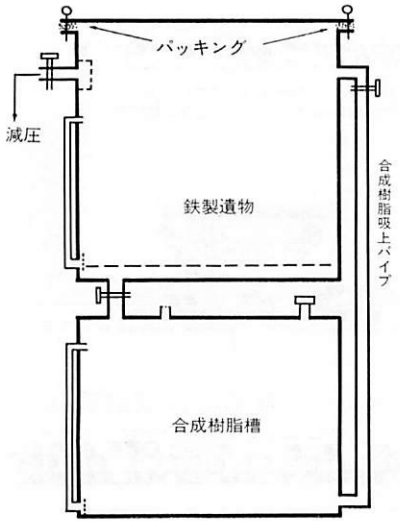
処理前　　処理後
第2図 木簡の凍結乾燥

鉄製遺物の保存処理　保存処理の原理は合成樹脂で全体を固めて外気と遮断し，同時に補強強化することである。

まず，遺物をアセトンかアルコールに浸して洗浄し，最終的には，105℃下で乾燥し水分を除去する。乾燥したら第3図のような構造の装置を利用して減圧方式で合成樹脂を含浸させる。このとき，鉄製遺物の表面に合成樹脂による艶を残さないように合成樹脂自身の選択と処理途上の技術に充分な配慮が必要である。現在，当研究所で使用している合成樹脂は油性のエマルジョンタイプ“NAD—10, Rohm and Hass”である。

しかし，処理後も密封容器などで恒湿状態を維持して保管することが望ましい。

一方，さびが激しく鉄製遺物本来の形状を判別しにくいような場合には，X線による透過写真で調査することができる。姫路市宮山古墳出土の鉄刀類80余点を保存処理した際，環頭大刀に“象嵌”があることを発見した（口絵)。



第3図　鉄器処理装置

その他，おもなものとしては次の鉄製遺物に保存処理を施した。石川県羽咋市柴垣山円山第1号墳出土短甲（1970年1月)，古川市長者原出土わらび手刀等（1971年2月)。

遺跡の保存　平城宮跡第70次調査検出の礎石がその表面下平均10cmまで風化してしまい砂質状の土塊に変性していた。これを合成樹脂で固化し，露出保存した（1971年3月)。

福井県朝倉氏館跡の風化した礎石 2,000個の接着および補強強化の処理，さらに築地基底部の保存処理を施して露出保存している（1970年6月)。

加賀市法皇山横穴古墳の崩壊防止のための処理を行なった（1971年3月)。

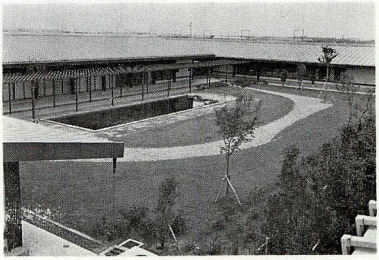
(沢田正昭)

平城宮跡の整備（1）

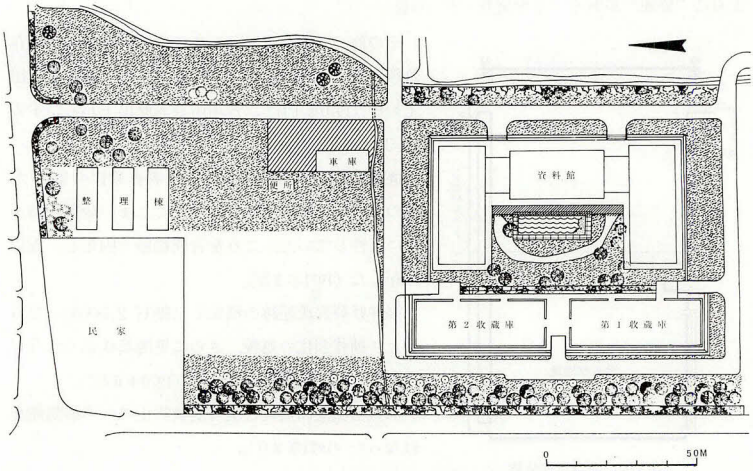
平城宮跡発掘調査部

平城宮跡の整備は国の補助事業として，1964年度から奈良県が事業主体となり，第２次内裏朝堂院地区，宮西南隅など約13haを終了している。これと併行して1966年から文化庁が直営事業として遺構覆屋の建設，宮内水路の改修（約2600m），および発掘調査や整備のための仮設道路（幅員４mコンクリート舗装延長約800m）の造成などを行なってきたが，本年度から，これらすべてを本研究所で行なうこととなった。

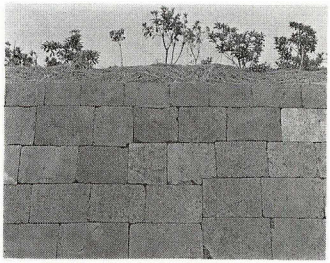
所で宮跡整備については，平城宮跡保存整備委員会の基本計画部会において次のような基本方針が採択されている。1）平城宮跡は遺跡博物館（Site Museum）として整備活用をはかる。遺跡博物館とは遺跡そのものを理解し易いように整備した施設をいう。2）宮跡全体をいくつかの地区（例えば４地区程度）に分かち，地区毎に調査との連繋を考慮しつつ整備計画をたてる必要があるが，当面，基壇修復，張芝，植樹，苑路造成等の整備は覆屋周辺の東部地区からはじめ，同時に未発掘地についても可能な限り囲柵，排水施設，草園造成等ある程度の整備を行なう。



第１図　平城宮資料館中庭整備状況



第２図　平城宮資料館周辺整備計画図



第3図　西面大垣整備状況（西より）

また水上池,佐紀池,御前池は宮跡の維持管理および木簡等木質埋蔵物の保存の為の地下水位の維持に必要な水源として利用する必要がある。3）管理施設，展示施設，便益施設については利用者の利便および地下遺構との関連を検討し適切な配置を考える。4）将来，建物，築地大垣，庭園等についてある程度の復原を行なう。5）宮跡と関係の深い旧朱雀大路については，可能な範囲について早急に保存整備を行なう。なお羅城門跡も保存整備するよう努力する。6）宮内を通過する軌道,道路は将来迂回されることが望ましい。

以上の趣旨にそって，本年度は水路改修，仮設道路の造成，推定第2次内裏及び資料館周辺の整備を行なった。水路改修は資料館東側及び推定第2次朝堂院東南の二個所で延べ480m，また仮設道路は，資料館から南下し近鉄線にそって東に折れ市道に達する延長855m（有効幅員4m砂利舗装）を造成した。内裏整備の面積は約6,000㎡で主として第70次調査区域を対象とし，礎石の遺存した建物は礎石をそのまま露出し，また築地部分は盛土して上面を覆屋と大極殿を結ぶ園路とした。資料館周辺については，一条通に面する門および構内道路を造成し，同時に張芝植樹を行なった。また管理上の要請から周囲に低い土塁を作ったが，とくに西側土塁は宮の西面大垣に相当するので，県道側を高さ1.2mの凝灰岩切石積とし，上面に灌木を，内側斜面には高木を植栽した。樹種は，奈良時代の植生に近く，浅根性でかつ排気ガス等に強いものを基準に選定した。また中庭には第56次調査で検出した庭園遺構の一部をそのまま移し展示した。以上45年度の総工事費は5,985万円である。

（牛川喜幸）

植物根系の調査

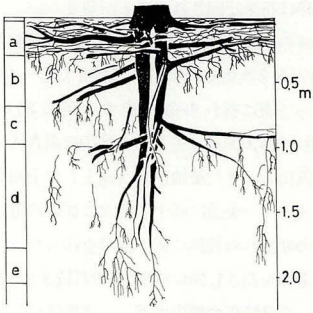
平城宮跡発掘調査部

本調査は，植物の根系が遺構にどのような影響を与えているかを知ることにより，遺構上面に植栽する樹種の選定および遺構面保護の方法を検討することを目的とするものである。今回の調査は，平城宮跡推定第１次内裏北側の宅地跡に残存している 10～40年生のマツ・ムク・カシ・カエデなど８種類11本の樹木について行なったものである。

従来の根系調査は生態的な意味の調査がほとんどである。今回の調査では根の垂直的な伸び，特に遺構面と根の関係をみるために，苅住昇氏の調査法（林業試験所調査報告第94号）を応用した。すなわち根元より50㎝離れた所に巾１m，長さ２mのトレンチを設けて，土層図と

各土層に表われる根の径と，半面の根の形態を調査した。なお根の形態の実測は写真測量によった。調査木が少なく定量的な解析はできなかったが，各樹種とも遺構面への影響はほとんどなく，一部の樹木で径1～7㎜の細根が数本侵入しているに過ぎなかった。各樹種とも細根・太根の分布のしかた，多さ・頻度の変化など樹種毎の個有の形態的特性は認められるが，直根の発育はほとんどみられず，従来の深根性（マツなど）浅根性（ムクなど）樹種の差はみられなかった（第1表）。

第1図　クロマツ　（移植・樹令35年・樹高8.7m・胸高直径30cm）



第2図　クロマツ　（天然更新・樹令40年・樹高15m・胸高直径25cm）
苅住 昇　林業試験所調査報告第94号

第1・2図のクロマツの比較例でわかるように今回の調査木は移植樹木のため直根が無く，（人工植栽は天然更新に比べ、直根が傷つけられやすい。また直根は再生能力がない。）

また根系全体の深層部への伸びが少ないのは，宅地のため有効土層（Fumus層）の薄さや，土壌条件の因子が強く作用したものと推定される。事実他の樹種でも硬い酸化鉄層や，バラス敷の硬い遺構面での根の屈曲・腐殖がみられた。今後の問題として，現在遺構面に侵入している細根の生長，有効土層の厚い軟質遺構面での根系の発育，また実生木の調査が必要である。

（田中哲雄）

樹種	樹令(年)	樹高(m)	胸高直径(cm)	クローネ拡り(m)	各土層断面に現われる最大径(mm) Ⅵ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	遺構面
Diospyros Kaki Thunb. (カキ)		5.4	17	5～7	×	257	64	30	10	8	ナシ
Aphananthe aspera Planch. (ムク)	21	13.7	25	10～13	×	157	100	5	ナシ	ナシ	ナシ
Pinus Thunbergii Parl. (クロマツ)		10.7	30	9～10	×	40	20	1	×	ナシ	ナシ
Quercus glauca Thunb. (アラカシ)		7.5	40	6	100	60	×	20	×	5	ナシ
Myrica rubra Sieb et Zucc. (ヤマモモ)		8.0	28	4	40	27	×	30	10	5	2
Pinus Thunbergii Parl. (クロマツ)	35	8.7	30	5～6	40	48	×	15	×	1	0.7
Meria Azedarach L. var. japonica Makino (センダン)	22	7.7	25	5～6	84	9	×	10	×	8	7
Sciadopitys verticillata Sieb.et Zucc (マキ)		9.4	12	2～3	60	45	×	7	×	ナシ	ナシ
Acer palmatum Thunb. (モミジ)		7.0	15	5	9	8	×	4	ナシ	ナシ	ナシ
Acer Burgerianum Mif. (トウカエデ)		5.0	12	3	×	28	×	13	ナシ	ナシ	ナシ

第1表　× は無い土層，　ナシ は根系が全然現われない
土層　Ⅰ 積土赤褐色植壌土　Ⅱ 黒色砂壌土(腐殖有)　Ⅲ 灰黒色植土　Ⅳ 黄褐植壌土
Ⅴ 黄褐植土(バラス混じり)　Ⅵ 茶褐砂壌土
a 黒色植土(腐殖に富)　b 灰黒植土(腐植有)　c 黄橙植土(腐植乏)　d 黄橙植土
e 黄橙植土(礫含)(分類は農学会規定による)

外国出張概要

韓国の古建築保護事業　1970年9月2日より30日の間，韓国に出張し，彼国における古建築および関連文化財の研究と，文化財保護事業の実施状況の調査を行なった。調査はきわめて短時日ではあったが，文化財管理局，国立博物館，慶州市その他各方面各位の御厚意によって，きわめて多くの収獲を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

韓国においては文化財保護行政は，文化公報部の外局である文化財管理局がその任に当っている。局は庶務，文化財，管理の三課と文化財研究室，および付属の文化財委員会からなっている。このうち主として行政事務を担当するのは文化財課であって，管理課は旧王宮管理を業務とする。文化財研究室は，民俗学，無形文化財，美術工芸，建築学，保存科学の各分野の専門家を集めて，専門的技術的事項を扱っている。文化財委員会は諮問機関であるが，委員のほか多数の専門委員を持つ。専門委員は工事監督等の実務を分担している。このほか，部の付属機関としては，国立博物館（慶州・扶余・公州に分館がある）と国楽院がある。

指定物件は宝物（日本の重要文化財に当る）が木造建造物84件，石塔175件，他に美術工芸品等を加え総数641件であって，このうち特に貴重なものは国宝に指定されている。以上の有形文化財に史蹟（183件）等を加え，文化財総数は859件となっている。

建造物修理事業は相当活発で，現在現場は20棟ほどある。うち5棟が解体修理で，このなかには高麗時代の遺構鳳停寺極楽殿も含まれている。その他は屋根葺替や塗装工事であるが，他に特別な大工事として仏国寺の復旧工事がある。修理には国，道，市，郡の補助金が出され，市又は郡が工事の実施に当る。しかし実際にはほとんど全額国庫補助金である。工事監督には文化財研究室員や文化財委員会専門委員がこれに当る。施工は入札による請負制であるが，業者は国家試験に合格した技術者のいる文化財保存業者（12社）に限られている。

新しい問題を含んだ修理工事現場の例としてソウル南大門をあげておこう。この門は1448年の建築であり，李朝初期を代表する建築として国宝に指定されており，首都の象徴としての意義も大きい。この門は1962年に修理が加えられ，屋根葺替と塗装が行なわれたが，近年都市の発展にともない，門は街路の中島にとり残され，周囲は終日自動車の渦がたえない。このため，排気ガスの影響いちじるしく，湿気の影響もあって，修理後わずか7年で彩色はすっかり黒ずみ，石垣表面にも黒色ススが付着，今回の修理となった。

文化財管理局庁舎前では，試料の曝露試験を併行して実施中であった。

（伊藤延男）

第1図　修理に着手したソウル南大門

アフガニスタンの調査　クシャン朝文化を中心とする中央アジアの考古学的調査を目的とする京都大学第二次中央アジア学術調査の第1回調査隊員として,昭和45年9・10月の両月アフガニスタンにおいて，主としてバーミヤンの仏教遺跡の写真測量に従事した。バーミヤンはアフガニスタンの中央をほぼ東西に横切るヒンズクーシュ山中の盆地で，海抜2,500m，首都カブールから北西約240kmの地である。

仏教時代，この地には石窟を中心とした大伽藍が営まれ，当時の盛況は玄奘や慧超の記録からもうかがえる。この石窟寺院の中心は東西の大仏像（像高東35m，西53m）であり，両石仏の龕の頂上には現在も壁画が残っており，また多数の石窟にも建築装飾や壁画が残っている。バーミヤンには他にフォラディ谷の石窟群，カクラク石窟群などがあり，総延長は数kmに及ぶ。今回の調査では53m像，35m像それぞれの立面図作成と，それらを含めた約1kmにおよぶ断崖にうがたれた多数の石窟群全体の立面及び平面図作成のための地上写真測量を行なった。（牛川喜幸）

第2図　バーミヤンの石窟

インドにおける遺跡の展観　1971年2・3月にかけて西パキスタン・インドの遺跡を訪れ，遺跡の保存・整備・展観と遺跡博物館の視察調査を行なった。インドにおける遺跡の調査・保存は，J．マーシャルとM．ウイラーによっておし進められ，遺跡博物館の構想を生みだしていった。西パキスタンのモヘンジョダロ，タキシラ，バンボール遺跡は，いずれも広大な規模を有し，部分的に発掘された遺構は，きれいに補修・整備され，特に遺構内の排水には工夫をこらし．遺跡の一部に覆屋を設け，遺構の保存・展観につとめ，主要な遺構には，その名を表示している。遺跡のそばに遺跡博物館があり，出土遺物を展示し，遺跡案内官をおき，遺跡案内書を備えている。ただモヘンジョダロの都市が水位の上昇及び風化により崩壊しつつあるのを，いかにくい止めるかが重大な問題である。インドにおける遺跡の調査・保存・展観方法は，ほぼ西パキスタンと同じである。古建造物の補修として，アジャンター洞窟壁画は，かなり剝落止めが施されている。カジュラホ寺院を飾る彫刻群をはじめ多くの石造建築は，きれいに整備されていた。このように，遺跡の発掘調査とともに遺跡の保存・整備・展観が重要視されているのである。最後に特筆すべきことは，ニュー・デリーにある考古学院が，修士および同程度の学歴を持つ学生10名に20ヶ月間（内6ヶ月間は，カリバンガン遺跡の発掘実習）で考古学の専門課程を研修させ，専門家の養成をはかっていることである。（菅原正明）

第3図　タキシラ・ジャンディアール遺跡

公開講演会要旨

大仏背後の山　平安時代に築かれ，重源によって撤去された大仏背後の山は，従来，基二丈高四丈の小山と解されていたが，その築造則に行なわれた論争を記録した天長4年(827)の太政官牒の解読を正すことによって，築かれたのは小山ではなくて，もっと山であったことが判明する。かつ，論争に参加した人々は官人，僧侶，技術者に分類されるが，各人の地位や出自を考えてゆけば，意見の対立の根源が窺われる。ことに技術者については，造寺司以後にわかに登用された三嶋嶋継と，造東大寺司ゆかりの木工寮との対決として把握することが可能である。

築かれた山の具体的な姿は，「東大寺造立供養記等」，撤去時の記録をもとにして高さは6丈，広さはおそらく12丈と推定される。それを図と模型であらわすと，頂上は大仏の肩に及んで，周囲は大仏を三方から囲む程の大きさとなる。蓮華座も半分以上土中に入っていたことになる。現在蓮華座の後半分がかなりよく保存されているのは，このためではあるまいか。

山は大仏の破壊を防止する策であったが，必ずしも有効な手段ではなかったと思われる。なぜならば，斉衡2年(855)に大仏の頭が落下するという事件が起るが，それは山によってあまりに軀体部が固体された結果ではないかと考えられるからである。大仏背後の山は，文化財保護事業の先蹤ともいうべきであり，今日の我々に多くのことを教えている。（伊藤延男）

七大寺巡礼私記と十五大寺日記　20ページ参照。　（丁　稔）

南都の高僧像について　鎌倉時代の南都の高僧画像は，明瞭に，当時代における新・旧両画風の種々の様相を示すものとして，南都絵画史の上からも，またわが国の肖像画史の面からみても，注目される。旧派，とくに法相・三論教学の祖師画像においては，奈良・平安時代以来の鉄線描による，色調の明かるい画風を示す作例が多い。新派，とくに律教学の祖師画風および若干の華厳教学の祖師画像においては，宋画の影響を受け，謹細な描線によって写貌し，色感の冷たい画風を示す作例がすくなくない。鎌倉時代の南都高僧像の展開は，南都教学の復興運動や戒律復興の運動と密接に関係しているが，この際，戒律復興が積極的に新しい宋代文化を受容し，たとえば四分律資持家の学説を受容したのもその一端であるが，祖師画の面でも謹細な写実を根底とした宋の祖師画の影響を，直接的に受けたのに対し，法相もしくは三論の教学復興は，もっぱら伝統復古の面がつよかった点に，その新旧の差異があらわれたとみられる。

しかし，この新・旧両派の折衷は，意外に早い時期におこなわれたようである。文永4年(1267)宰村筆の唐招提寺行基像は，奈良絵仏師の旧派と推定される画派の絵師による，宋風画の受容がみられる。以後，南北朝時代以後の南都高僧像は，基本的にこの折衷された画風の継承を中心とし，南都では新らしい画風の展開はみられなくなる。（平田　寛）

十一面観音の信仰について　7・8世紀の仏教信仰のなかで，観音信仰の占める部分は極めて大きい。聖観音は暫くおくとしても十一面，不空羂索，千手など変化の観音に対する信仰が意外にさかんであったことは，文献，遺像の両面からいえる。これら三観音はこの時代の雑密教的信仰を示すものであるが，これらを受容した素地が官寺ではなく，むしろ優婆塞，優婆夷行者など在野の仏教者であった点が注目される。このことは，6世紀以来我国の仏教受容の一態容を示すものとして極めて興味深い。即ち仏教渡来以前の呪術的な信仰を，仏教信仰とすりかえる際当然想像される現世利益的果報を主とする庶民の受容の態容といえる。十一面観音像は7・8世紀の遺像として，現在法隆寺金堂壁画，法隆寺献納押出仏，那智山出土金銅仏，聖林寺像などが知られている。長谷寺木尊も，現在の像は天文7年（1538）の再興ではあるが，当初の像は8世紀初頭の造像であり，更に二月堂本尊はいまその姿を窺いえないが，天平勝宝4年（752）実忠和尚によって造顕されたものであるという。二月堂は実忠和尚の私寺として十一面懺悔のためにたてたものであるが，古来から若狭の水が二月堂の閼伽井に通じているといわれている。両者の関係は，遠敷八幡神の献水の伝説以外に確たる説を聞かないが，古代以来中世までの近畿地方の十一面観音像造像地点（国宝，重要文化財に指定されているものに限った）を地図上におとすと，大和から甲賀，湖東，湖北を経て若狭に至るルートが出来る。著名な湖北の渡岸寺十一面観音像もこのルートの上にのるものである。このルートが大和から若狭へ進んだものか，その逆かは問題であるが，少くとも若狭と二月堂とは十一面信仰において結ばれていたことが了解される。なおこれは今後の研究に待つべきであるが，法隆寺金堂の十一面観音像の壁画が金堂の東北隅に位置することである。東北は丑寅に当り，いわば鬼門である。二月堂も東大寺伽藍にとっては東北方に当る。このことは古代における十一面信仰の内容を示唆して興味深い。更に平城宮の東北方に法華寺があり，現在の著名な十一面観音像は宮の創始より時代が降るが，藤原宮の東北にも法花寺という村落名が残っている。これらを含めてさらに古代の十一面信仰について調査研究をつづけていきたいと考えている。

（松下隆章）

薬師寺講堂三尊像の原所在についての検討　薬師寺講堂三尊像がいつ，どこから現講堂へ移入されたかについては従来明徴を欠き，漠然と現講堂が再建された幕末安政3年（1856）の入仏供養の頃が考えられていた。したがって現講堂移入直前の所在も，「薬師寺古記録抜萃」（寺誌叢書第4所収）等の限られた記録によって，間接的に同時西院弥勒堂が推測されているにすぎなかった。また同じ「古記録抜萃」は西院弥勒堂以前の所在を八条村薬師堂とし，さらに原所在を本薬師寺と伝えているため，この三尊の原所在をめぐって本薬師寺本尊説と植槻寺本尊説とが生じていた。

第1図　薬師寺講堂三尊像

この講演では，従来の両説ともその依るべき文献が必ずしも信憑性の高いものではなく，いずれもなお十分な説得力に欠けることを指摘し，さらに最近確認された薬師寺近世記録，日記類によって，安永9年（1780）における西院弥勒堂からの講堂跡移入をはじめ，天明3年（1783），文政2年（1819）の修理などと，その後の沿革を明らかにした。また，新しく確認された沿革や移入の経緯から，従来の原所在説は白紙に帰して再検討されるべきことを指摘，さらに金堂三尊の江戸時代以来の西の京新鋳説が，近世における現講堂三尊の講堂入仏と講堂再建の事情から派生したものであることにもふれて，講堂三尊の講堂移入をめぐる経緯や薬師寺論争における意義についても検討した。（長谷川　誠）

密教の鎮壇具　平安時代には密教が盛んになり，それとともに地鎮・鎮壇の儀法も密教の教義にもとづいて行われている。天台系の「阿娑縛抄」，「門葉記」，真言系の「四巻」，「覚禅鈔」などにはこの具体例が多く記されている。また，寺院の修理工事等によっても，その実例が10ヶ所ほど発見されている。ひと口に密教による鎮壇具とは言っても，その埋納法や発見された遺物には場合によっていろいろなちがいが見受けられるが，天台系と真言系によって二大別することができる。

この二宗派による埋納法は，概ね次のようである。たとえば天台宗の場合，天喜4年（1056）2月15日から行なわれた一条院の供養の時には，予め掘られた穴の底に1枚の紙を敷き，その上に輪宝を置く。そして輪宝の中心に橛を立て，鎚で橛の頭を1080返打ち叩く。次に五宝・五穀あるいは散供等を入れて埋める。真言宗では，長治2年（1105）10月に行われた祇園御堂の供養の際には，仏壇の下の中央に五宝・五香・五薬・五穀などを納めた瓶を五色の糸でからげて埋め，橛の鋒で三鈷輪宝の中央を貫いて堂の八方の廂の下に埋めている。橛を埋める時には，鎚で打たずに穴を深く掘って埋めるものとされている。

発掘調査などによって発見された実例を見てもこれらによく合致するものが多い。天台系のものとしては仁和寺[註1]・和歌山城から，真言系のものとしては石山寺多宝塔[註2]・興福寺大御堂[註3]・金剛峯寺家康御霊屋などの調査によって発見されている。これらは，いずれもそれぞれの教義にもとづいて埋納されたものである。

第2図　興福寺大御堂鎮壇具出土状態

註　1　鎮壇具は金堂跡で発見されたが，金堂は天永4年（1113）焼失の後，保延元年再建時に埋納されたものと考えられている。仁和寺は真言宗御室派であるが，この時の供養は時の天台座主忠尋が導師を勤めている。

2　滋賀県教育委員会『国宝　石山寺多宝塔修理要録』（1961年3月）

3　興福寺『興福寺菩提院大御堂』（森　郁夫）

奈良国立文化財研究所要項

Ⅰ　研究事業概況

公開講演・現地説明会

1　1970年5月30日　第27回公開講演会　於調査部「デンマーク・イギリスの遺跡とその保存整備」　田中　琢。「近畿地方を中心とする民家研究の現状」　宮沢智士。

2　1970年9月12日　於小治田宮跡推定地調査現場　木下正史。

3　1970年9月26日　於平城宮推定第1次内裏地域調査現場　宮本長二郎。

4　1970年10月31日・11月7日　第28回公開講演会　於本所　文化財保護法施行20周年記念—仏教文化史研究—　(57ページ)

外国出張

1　韓国古建築の調査研究ならびにその保護事業に対する意見の交換　1970年9月20日～9月27日　伊藤延男　韓国。

2　クシャーン朝文化を中心とする中央アジアの考古学的調査　1970年9月4日～11月7日　牛川喜幸　インド・パキスタン・アフガニスタン。

3　考古遺跡の調査研究ならびにその保護事業に対する意見交換　1971年2月17日～3月6日　菅原正明　パキスタン・インド・タイ。

海外学者招致

韓国文化公報部文化財管理局文化財研究室　金東賢工学士，日本学術振興会外国人奨励研究員に採用され，滞日　1970年12月16日～1971年12月15日本所が受入れ機関となり，主として建造物研究室において指導した。

平城宮跡発掘調査指導委員会

1　1970年9月18日　於調査部　現地視察，藤原宮跡・飛鳥地方，平城宮跡第69次調査現場。

2　1971年2月23日　於調査部　45年度後半の調査結果，46年度の計画について指導をうけた。

普及事業

1　平城宮跡覆屋特別公開　1970年4月29日～5月5日　見学者1,365名。

2　文化財保護法施行20周年記念平城宮資料館・覆屋特別公開　1970年10月20日～11月8日　見学者14,747名。

3　平城宮跡見学者数

区　分	覆　屋	資料館	計
1970年度	49,805名	13,836名	63,641名
累　計	110,316名	13,836名	124,152名

昭和45年度文部省科学研究費交付金による研究

研究課題	種類	担当者	交付金
			単位千円
七大寺巡礼私記の研究	総合A	松下隆章ほか	1,500
平城京の復原的研究	一般A	田中　稔	15,500
新しい遺跡測定法の開発研究	一般A	坪井清足	1,600
中国・朝鮮における建築および庭園の基礎的研究	一般B	伊藤延男	2,800
建造物の経年的変形に関する研究　—とくに木造古建築について—	一般D	牛川喜幸	200
古代における造瓦技術の研究	一般D	河原純之	180
弥生時代の木製品について	奨励A	黒崎　直	100
古代鉄製工具の研究	奨励A	佐藤興治	100
吉備出土瓦の研究	奨励A	松下正司	100
科学的方法による産地分析への試み	奨励A	沢田正昭	100
縄文・弥生時代の布	奨励A	小笠原好彦	100
年輪計数表による古建築の年代判定に関する研究	奨励A	藤原武二	200

Ⅱ　図書および資料　(1970年度末現在)

図書　21,206冊　　写真　72,648点

Ⅲ　施　設　(1970年度)

土地　862,950㎡(そのうち平城宮跡856,502㎡)

建物

建　物	春日野	平城	藤原	計
事務所	797	—	155	952
倉庫・収蔵庫	191	2,728	—	2,919
車庫	20	128	—	148
会議室	40	—	—	40
講堂	109	—	—	109
写真室	86	—	—	86
資料館	—	1,943	—	1,943
覆屋・展示棟	—	1,935	—	1,935
その他	200	576	—	776
計	1,443	7,310	155	8,908

Ⅳ 予 算 (1970年度)

人件費75,424千円　物件費197,221千円　計272,645千円

Ⅴ 研究成果刊行物

奈良国立文化財研究所学報

年度	名称	担当者
昭29	第1冊 仏師運慶の研究	小林 剛
	第2冊 修学院離宮の復原的研究	森 蘊
昭30	第3冊 文化史論叢	小林 剛・森 蘊・杉山信三・田中一郎・田中 稔
昭31	第4冊 奈良時代僧房の研究	浅野 清・鈴木嘉吉
昭32	第5冊 飛鳥寺発掘調査報告	浅野 清・杉山信三・坪井清足・鈴木嘉吉
昭33	第6冊 中世庭園文化史	森 蘊
	第7冊 興福寺食堂発掘調査報告	坪井清足・鈴木嘉吉
昭34	第8冊 文化史論叢	小林 剛・守田公夫・浜田隆・杉山二郎
	第9冊 川原寺発掘調査報告	杉山信三・坪井清足・鈴木嘉吉・田中 稔・工藤圭章・田中 琢
昭35	第10冊 平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告	杉山信三・坪井・鈴木嘉吉・工藤・田中琢・岡田・岩本
昭36	第11冊 院家建築の研究	杉山信三
昭37	第12冊 巧匠安阿弥陀仏快慶	小林 剛
	第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察	森 蘊
	第14冊 「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究	守田公夫
	第15冊 平城宮発掘調査報告Ⅱ 官衙地域の調査	坪井・鈴木嘉吉・田中 稔・工藤・田中 琢・岡田・狩野・河原
昭38	第16冊 平城宮発掘調査報告Ⅲ 内裏地域の調査	櫃本・坪井・田中稔・工藤・沢村・田中琢・岡田・狩野・河原・岩本
昭40	第17冊 平城宮発掘調査報告Ⅳ 官衙地域調査2	櫃本・坪井・田中稔・工藤・沢村・田中琢・岡田・狩野・河原
	第18冊 小堀遠州の作事	森 蘊
昭42	第19冊 藤原氏の氏寺とその院家	杉山信三
昭44	第20冊 名物裂の成立	守田公夫

奈良国立文化財研究所史料

年度	名称	担当者
昭29	第1冊 南無阿弥陀仏作善集 (複製)	田沢 坦
昭30	第2冊 西大寺叡尊伝記集成	小林 剛
昭38	第3冊 仁和寺史料 寺誌編 1	田中 稔
昭39	第4冊 俊乗坊重源史料集成	小林 剛
昭41	第5冊 平城宮木簡 1	田中 稔・田中 琢・狩野・原・横田拓実・鬼頭・加藤 優
昭42	第6冊 仁和寺史料 寺誌編 2	田中 稔・狩野・加藤 優
昭44	第5冊 平城宮木簡 1 解説 (別冊)	坪井・守田・田中 稔・田中 琢・狩野・原・横田拓実・工楽・鬼頭・加藤優・岩本
昭45	第6冊 唐招提寺史料 1	田中稔・加藤 優・永野温子

Ⅵ 人事移動

(1970年4月1日～1971年3月31日)

4月1日　文化庁記念物課文化財調査官併任解除 調査部主任研究官併任　横山浩一。研究補佐員採用　西 弘海・天田起雄。事務補佐員採用　中村葉子・吉田恵美子。美術工芸研究室長に昇任　平田 寛。

5月1日　文部技官に配置換え　西 弘海・天田起雄。文部技官採用　菅原正明。

6月1日　事務補佐員採用　細川純子・仲井武司。

6月15日　辞職，神奈川県教育委員会に就任　真鍋俊照。

7月1日　平城宮跡整備管理係長併任 西村縣治。庶務課に配置換え　石川千恵子。事務補佐員採用　石田信子。研究補佐員採用　永野温子・山極用子。

7月13日　辞職　仲井武司。

8月1日　文部事務官に配置換え　西田健三。

8月24日　事務補佐員採用　前川重子。

9月1日　技術補佐員採用　渡辺康史。研究補佐員採用　水野和雄。

9月28日　技能員採用　飯田信男。

10月1日　文化庁記念物課文化財調査官に配置換え　田中 琢。考古第2調査室長に配置換え，飛鳥藤原宮跡調査室長併任 河原純之。考古第3調査室長に昇任 八賀晋。考古第2調査室主査任命　佐原真。文部技官に配置換え 渡辺康史。文部技官採用　東野治之。

10月18日　事務補佐員採用　中坊ひろ美。

3月31日　辞職，大学セミナーハウスに就任 西村縣治。辞職，福岡県教育委員会に就任　石松好雄。辞職　上岡三佐子・高橋靖子。

Ⅶ　組織規定

文部省設置法　抜萃　　昭和24年法律第146号
昭和43年6月15日一部改正

第36条　第43条に規定するもののほか，文化庁に次の機関を置く。

国立文化財研究所（前後略）

第41条　国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行なう機関とする。

2　国立文化財研究所の名称及び位置は，次のとおりとする。

名　　称	位　置
東京国立文化財研究所	東京都
奈良国立文化財研究所	奈良市

3　国立文化財研究所には，支所を置くことができる。

4　国立文化財研究所及びその支所の内部組織は文部省令で定める。

文部省設置法施行規則　抜萃

昭和28年1月13日文部省令2号，追加昭和43年6月15日文部省令20号，昭和45年4月17日文部省令第11号

第5章　文化庁の附属機関

第4節　国立文化財研究所

第2款　奈良国立文化財研究所

（所　長）

第123条　奈良国立文化財研究所に，所長を置く。

2　所長は所務を掌理する。

（内部組織）

第124条　奈良国立文化財研究所に，庶務課，美術工芸研究室，建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部を置く。

（庶務課の事務）

第125条　庶務課においては，次の事務をつかさどる。

1　職員の人事に関する事務を処理すること。

2　職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

3　公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

4　経費及び収入の予算，決算その他会計に関する事務を処理すること。

5　行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

6　平城宮跡の遺構及び遺物の保全のための警備に関すること。

7　庁内の取締りに関すること。

8　前各号に掲げるもののほか，他の所掌に属しない事務を処理すること。

（美術工芸研究室等の事務）

第126条　美術工芸研究室においては，絵画，彫刻，工芸品，書跡，その他建物以外の有形文化財及び工芸技術に関する調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

2　建造物研究室においては，建造物に関する調査研究を行ない並びにその結果の公表を行なう

3　歴史研究室においては，考古及び史跡に関する調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

（平城宮跡発掘調査部の7室及び事務）

第127条　平城宮跡発掘調査部に，考古第1調査室，考古第2調査室，考古第3調査室，遺構調査室，計測修景調査室，史料調査室及び飛鳥藤原宮跡調査室を置く。

2　前項の各室（飛鳥藤原宮跡調査室を除く）においては，平城宮跡に関し，次項から第6項までに定める事務を処理するほか，その発掘を行なう。

3　考古第1調査室，考古第2調査室及び考古第3調査室においては，別に定めるところにより分担して，遺物（木簡を除く）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

4　遺構調査室においては，遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

5　計測修景調査室においては，遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

6　史料調査室においては，木簡の保存整理及び調査研究，史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

7　飛鳥藤原宮跡調査室においては，飛鳥藤原宮跡の発掘，遺構及び遺物の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

職　員

(1971年10月1日現在)

所属	氏名	官職	担当
	松下　隆章	文部技官　所長	
庶務課	石藤　守雄	文部事務官　課長	
	寺尾　敏明	文部事務官　課長補佐	
	広瀬　二朗	文部事務官　専門員	平城事務
	岩本　次郎	文部事務官　庶務係長	庶務図書資料
	坂口　義尚	文部事務官　会計係長	会計
	広瀬　二朗	文部事務官　平城宮跡整備管理係長(併任)	平城整備管理
	八幡　扶桑	文部技官(併任)	写真
	井上　政和	文部事務官	庶務
	西田　健三	文部事務官	飛鳥藤原事務
	加藤　建夫	文部事務官	会計
	渡辺　康史	文部技官	平城整備管理
	大西　肇	文部事務官	会計
	丹阪　信次	文部事務官　警務員長	平城警備
	木寅　忠雄	文部事務官	平城警備
	森田　光治	文部事務官	平城警備
	岡田　博旡	文部事務官	警備
	中西　建夫	文部技官	自動車運転
	飯田　信男	文部技官	自動車運転
	宮本　宣代	事務補佐員	所長室付
	港　悦子	事務補佐員	庶務
	中村　葉子	事務補佐員	庶務
	田中みちこ	事務補佐員	庶務
	山下　久子	事務補佐員	会計
	福住八重子	事務補佐員	会計
	細川　純子	事務補佐員	会計
	中坊ひろ美	事務補佐員	会計
	中川かよ子	事務補佐員	図書資料
	森　千佳子	事務補佐員	平城庶務
	東田すみ子	事務補佐員	平城会計
	石田　信子	事務補佐員	平城図書資料
	梶　幸治郎	技能補佐員	平城保安
	石川千恵子	研究補佐員	平城公開
	城本きよの	業務補佐員	平城庁務
	前川　重子	事務補佐員	平城整備管理
美術工芸研究室	長谷川　誠	文部技官　室長	彫刻
	星山　晋也	文部技官	彫刻
	守田　公夫	調査員(非常勤)	工芸
建造物研究室	鈴木　嘉吉	文部技官　室長	建築
	牛川　喜幸	文部技官(併任)	遺跡庭園
	藤原　武二	文部技官(併任)	遺跡庭園
	細見　啓三	文部技官(併任)	建築
	村上　訒一	文部技官(併任)	建築
	福田　幸子	研究補佐員	資料整理
	福山　敏男	調査員(非常勤)	建築
歴史研究室	田中　稔	文部技官　室長	歴史
	松下　正司	文部技官(併任)	考古
	高島　忠平	文部技官(併任)	考古
	佐藤　興治	文部技官(併任)	考古
	加藤　優	文部技官(併任)	歴史
	堀池　春峰	調査員(非常勤)	歴史
平城宮跡発掘調査部	坪井　清足	文部技官　部長	
	横山　浩一	文部技官　主任研究官(併任)	考古
平城宮跡発掘調査部 考古第一調査室	横山　浩一	文部技官　室長	考古
	町田　章	文部技官	考古
	佐藤　興治	文部技官	考古
	菅原　正明	文部技官	考古
	西村　康	文部技官	考古
	黒崎　直	文部技官	考古
	山中　敏史	文部技官	考古
	沢田　正昭	文部技官	保存科学
	八幡　扶桑	文部技官　専門職員	写真
	佃　幹雄	文部技官	写真
	真木　礼子	技術補佐員	写真
	山極　用子	研究補佐員	資料整理
考古第二調査室	河原　純之	文部技官　室長	考古
	佐原　真	文部技官　主査	考古
	高島　忠平	文部技官	考古
	小笠原好彦	文部技官	考古
	甲斐　忠彦	文部技官	考古
	西　弘海	文部技官	考古
	吉田　恵二	文部技官	考古
考古第三調査室	八賀　晋	文部技官　室長	考古
	工楽　善通	文部技官	考古
	松下　正司	文部技官	考古
	阿部　義平	文部技官	考古
	田辺　征夫	文部技官	考古
	岡本　東三	文部技官	考古
遺構調査室	沢村　仁	文部技官　室長	建築
	細見　啓三	文部技官	建築
	宮本長二郎	文部技官	建築
	村上　訒一	文部技官	建築
	天田　起雄	文部技官	建築
	藤村　泉	文部技官	建築
計測修景調査室	牛川　喜幸	文部技官　室長	遺跡庭園
	藤原　武二	文部技官	遺跡庭園
	伊東　太作	文部技官	遺跡庭園
	田中　哲雄	文部技官	遺跡庭園
史料調査室	狩野　久	文部技官　室長	歴史
	横田　拓実	文部技官	歴史
	鬼頭　清明	文部技官	歴史
	加藤　優	文部技官	歴史
	東野　治之	文部技官	歴史
飛鳥藤原宮跡調査室	河原　純之	文部技官室長(併任)	考古
	宮沢　智士	文部技官　主査	建築
	猪熊　兼勝	文部技官	考古
	森　郁夫	文部技官	考古
	安達　厚三	文部技官	考古
	木下　正史	文部技官	考古
	稲田　孝司	文部技官	考古
	西村　康	文部技官(併任)	考古
	西　弘海	文部技官(併任)	考古
	天田　起雄	文部技官(併任)	建築
	石丸　洋	研究補佐員	考古
	黒崎　陽子	研究補佐員	考古
	宮本　敬一	研究補佐員	考古
	刀谷　敏博	技能補佐員	自動車運転

ANNUAL BULLETIN
OF
NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

1 9 7 1

CONTENTS

TEXT — Page

Preface 1

1. Restoration of Canon of the Original *Daibutsu*, Colossal Buddha, *Tōdai-ji* Temple 2
2. Votive Picture of the Ship of the *Zaō-dō* Hall, Yoshino 6
3. Researches on Sculptures and Pictures 7
4. Researchs on *Imai-chō*, an Old Town lasting since 16th Century, Nara Pref. (3) 8
5. Researches on MINKA (traditional styled house) in Ishikawa Pref. 12
6. Experiment on the Drainage of Roof Covered in Orthodox Style (*hongawara-buki*) 14
7. Reconstruction Model of a quarter of Building on Brick Platform, Nara Imperial Palace 15
8. Researches on Old Architectural Sites, Measurements and Arrangement of Historical Monuments 18
9. Document on the Reverse of *Shakumakaenron-rongisō* (釋摩訶衍論論義草) kept in the *Kōzan-ji* Temple, Kyōto 19
10. Study on *Shichidaiji-junreishiki* (七大寺巡礼私記), 'Personal note of pilgrimage round the Seven Temples of Nara' 22
11. Researches on the Old Books and Manuscripts 22
12. Researches on the Sites of Asuka, Fujiwara and Nara Palace 23
13. Excavation of the Roof-tile Kiln, No.53 *Narayama* Hill 37
14. Excavation in the *Kairyūō-ji* Temple 43
15. Researches of some other Sites and Relics 45
16. Scientific Methods for Preservation of the Sites and Relics 50
17. Arrangement of Nara Palace Site (1) 52
18. Growth of Roots of Plants and their Effect on the Building Remains 53
19. Brief Reports on the Research Tours in Foreign Countries 55
20. Summaries of the Lectures at the Open Lecture Meeting 57
21. Organization and Activities of the Institute 60

PLATES

1. Votive picture of ship
2~4. Remains of the assumed 1st Imperial Domicile, Nara Palace Site : building, brick wall and stairs
5. Remains of the assumed 2nd Imperial Domicle, Nara Palace Site : pillar stone-base in the East Outer-zone
6. Garden and ruined platform, called *Furumiya-dodan*, or platform of *Owarida* Palace Site in Asuka district
7·8. Remains of pond of the assumed *Owarida* Palace Site and tile with lotus design excavated there
9. Remains of oblong-shaped pond paved with rubbles, Fujiwara Palace Site
10. Reconstruction model of a building on brick platform, Nara Palace Site
11·12. Roof-tile kiln, No.53 *Narayama* Hill
13. Iron sword with silver-inlayed ring pommel of guilt bronze : before and after treatment, X-ray photo

Published by
Nara National Cultural Properties Research Institute
Nara, 1971